

# 刑事裁判覚書（再）

——証人尋問を中心として——

佐藤嘉彦

第一 はじめに

第二 供述証拠の信用性

一 供述証拠について 二 伝聞供述のゆがみについて 三 誘導尋問について 四 反対尋問について

第三 フランシス・L・ウェルマン『反対尋問の技術』について

第四 山室恵編著『刑事尋問技術』について

一 尋問の一般的手法と留意点——検察官の立場から 二 尋問の一般的手法と留意点——弁護人の立場から

三 尋問技術各論について

第五 日本弁護士会編『法廷弁護技術第2版』について

一 弁護人の主尋問 二 弁護人の反対尋問(1) 三 弁護人の反対尋問(2)

第六 周辺諸科学に学ぶ

第七 事実認定者の立場から

- 一 供述の信用性の判断
  - 二 知覚段階における誤り
  - 三 記憶段階における誤り
  - 四 供述の真摯性
  - 五 供述の正確性
  - 六 陪審員の心証形成
- 第八 おわりに

第二 はじめに

一 これまでは検察官が証人尋問に失敗しても、検察官面前調書（刑訴法三二一条一項二号後段）というセーフティ・ネットが張られており、事なきを得てきた。<sup>①</sup> 処罰すべき者を逃れさせることはなかった。被告人側の反対尋問は、「検面調書の露払いに過ぎない」との感を否めなかった。異常に高いとされる有罪率がそれを物語っていた。

二 しかし、裁判員裁判の導入により公判中心主義の徹底が求められ、検察官は、立証方法の変更を余儀なくされた。裁判官も、書齋で記録を精査し、真実を汲み取るという調書裁判からの脱却を迫られることになった。それは、「事実認定の可視化」といってよい。その結果、公判廷における証人尋問の比重が飛躍的に大きくなり、尋問技術の巧拙が、裁判の帰趨を大きく左右することになった。<sup>②</sup>

三 本稿では、定評ある尋問技術についてテキストの内容を紹介し、事実認定者の立場から、裁判官としての経験を踏まえ、若干のコメントをしたいと思う。<sup>③</sup> もとより、必要な供述の獲得も不当な供述の弾劾も、小手先の尋問技術によってこれをよくなし得るものではない。<sup>④</sup>

四 供述証拠は、供述者の認識が事実認定者に達するまでの各過程において、物的証拠と異なり誤りが介在する。そ

れを除去・是正するのが反対尋問である。そのためには、供述の変容・ゆがみ等のメカニズムを十分理解しておかなければならない。<sup>(5)</sup> 供述心理学をはじめとする周辺諸科学の知見が必要となる。

五 「言葉は事実を展開し得ない、語句は機微に触れてこない、言葉をそのまま受けとる者は真実を失い、語句に執われる者は迷う。ただちに言葉を発したその人の言わんとする真意を見て取らねばならない。言葉というものはしよせん円な具体的実物の、一面をしか表現できない、抽象的な不完全なものである」。<sup>(6)</sup>

「犬は物を投げると投げられた物に飛びつくが、獅子は投げられた物には見向きもせず、物を投げた当人に向かって飛びかかるという」。<sup>(7)</sup> 「一方に証する時は、一方は暗し」である。<sup>(8)</sup>

六 筆者は、『刑事裁判覚書へ事実認定を中心として』<sup>(9)</sup>（以下「覚書」という）において、主に「（裁判官として）どう心証をとるか」という視点から、供述証拠の問題を採り上げたが、本稿では、「（事実認定者へ裁判官・裁判員）にどう心証をとらせるか」という視点から論じてみたい。<sup>(10)</sup>

〔本稿は、ロースクールにおける講義のレジュメ（板書に代えて）を整理したもので、テキストないし参考文献として指定した山室恵編著『刑事尋問技術』と日本弁護士会編『法廷弁護士技術』の解説・解説の域を出ないものである〕。

（１） 被告人にとってのセーフティ・ネットは、「疑わしきは被告人の利益に」という大綱であった。しかし、この網は天網ではなく、疎にして無実の被告人を漏らす危険があった。

（２） これまでのように裁判官が書齋で矯めつ眇めつ記録を検討し（少なくとも筆者は、そうすることにより、すんでのい、誤りを避けてきた。判決書記案の段階でも、理由を書いているうちに、逆の結論の達することがあった）、真相を解明しようとするものではないから、法廷におけるパフォーマンスが重要になった。

- (3) これらは、筆者がロースクールにおける刑事模擬裁判等のテキスト等に指定し、使用しているものである。「コメント」は、筆者が付したものであるが、それは、多くの先輩の口頭や数多の著作の受け売りに過ぎない。
- (4) 「The best aren't the great dressers or the great actors, not the great theoretical lawyers, the very best are lawyers who do homework. The guys who come into court with the case down cold. Beginning to end. Can't be fooled. You know. You never really surprise a good lawyer. He never asks a question if he doesn't already know's answer. He comes prepared. This is The guy who'll kill you ever time」(『評決』―バリー・リーズ) 269。
- (5) フロイトの弟のゴールドン・オルポートは、伝聞証拠のゆがみについて、後述するとおり、詳細な研究をしている。
- (6) 「言は事を展ぶることなく、語は機に投ぜず、言を承くる者は喪し、句に滞る者は迷う」(『無門関』第三八則) である。
- (7) 秋月龍民『正法眼蔵』を読む(一九八二年) 一二四頁。
- (8) 前掲注(7)。タゴールが最晩年に孫娘たちのために書きのこした『もっとはんとうのこと』(内山眞理子訳) が思われる。
- (9) 「覚書」は、同志社法学六四巻三号六七頁以下に掲載されたものであり、『刑事裁判覚書―裁かば裁かれん念すれば花開く』(成文堂、二〇一四年) にも収めている。
- (10) 筆者の東京地裁時代の裁判長で弁護士任官された高木新一郎判事は、よく「代理人はアンテナを広げ、裁判官の力量を把握し、それに見合った立証活動をしなけらぬ」と論されていた。

## 第二 供述証拠の信用性

### 一 供述証拠について

供述は、知覚 (Perception)・記憶 (Memory)・表現 (Expression)・叙述 (Narration) の各プロセスを経て証拠資料となる。<sup>(1)</sup> いずれの過程にも、誤りが混入するおそれがある。反対尋問は、その除去・是正を図るために行われるものであるが、それが奏功するとは限らない(「やらない反対尋問が一番よい反対尋問である」などと揶揄さ

れることもある)。反対尋問を成功に導くためには、まず供述の各プロセスにおいて、どのような誤りが混入するおそれがあるのかを徹底的に分析・解明する必要がある。供述心理等の学際的な研究が求められよう。もともと、「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」と弁えねばなるまい。

## 二 伝聞供述のゆがみについて

1 村田宏雄『裁判科学』（一九五九年）には、伝聞供述の「ゆがみ」について、大略、次のような指摘がある。<sup>(2)</sup>

原情報に対して伝達された情報は、①水準化（話の凸凹が除かれて単純なものになる）、②強調化（話の中のある部分、ある観念をとくにはつきりさせる。ある部分が落とされるなら残された部分は必然的に強調され、重要さを与えられる。そのため強調化は水準化と相関関係にある）、③同化（伝達情報の内容変化が習慣、願望などに一致していく）の三点で「ゆがみ」が生ずる。

したがって、伝聞供述は、第一に、原供述に比べて単純化される傾向があるということができる。この場合、伝聞供述は供述者のもっている先入観や偏見の方向に沿って、話が単純化するので、それだけ原供述に対し、伝聞者の先入観や偏見が入り込む危険がある。裁判官としては、原供述から推理判断を下す場合、必要な資料だけを、必要でない供述部分から、あたかも雑音を除去するように抜き出すばかりでなく、裁判官自身の偏見や先入感が入らないよう注意しなければならない。また、反対尋問の場合、証人の偏見や先入感について、予め知識をもっておくと、証人の供述がどの方向に単純化され、そのために必要な部分が省略されるおそれがあるか、見当をつけることができる。第二に、伝聞供述は、原供述と比べて、話の中のある部分ある観念だけがとくに強調され、逆にある部分が落とされる危険がある。このため伝聞供述は、原供述に忠実でないのみなら

ず、とくに供述者の関心・興味のもつ点が誇張されることになる。したがって、必要な部分がないのみならず、この誇張の影響を受けて、誤った判断に導く可能性が多い。第三に、伝聞供述が、供述者の習慣・態度・願望などに一致するという危険があるという傾向である。この傾向のある供述者の場合には、伝聞証拠は事実を伝えるよりも、供述者の習慣・態度・願望などが、事実を素材にして供述されるので、事実を知るための資料にかかる供述を使用することは危険である。その点でも、伝聞法則の適用があることは、科学的にも正当である。裁判官が供述証拠を取り調べる場合には、自分の心の拠点となっている所属集団の習慣・態度・願望などが明らかである場合、あまり証人の供述がこれらと一致するならば、その点は伝聞でないか疑ってかかる必要がある。△傍線は、筆者が付したものである。▽

2 これは、フロイトの弟のゴードン・オルポートらの伝聞証拠についての研究に依拠したもので、供述証拠一般についての記述ではない。しかし、供述の「ゆがみ」は、伝聞でなくても、知覚、記憶、表現、叙述の各プロセスにおいて起こり得る。細部が削り取られ、特徴が強調される。予断と偏見が忍び寄る。このゆがみに対処するためには、供述心理学者や脳神経科学者の知見（「注意のサーチライト説」・「注意のレーダー説」など）等が必要となる。限られた時間と空間の制約のなかで反対尋問を奏功させるためには、これらのメカニズムを十分に把握しておかねばなるまい。<sup>③</sup> 傍線を付した部分は、拳々服膺すべきである。

### 三 誘導尋問について

1 前出・村田『裁判科学』一九八頁以下には、誘導尋問についても、大略、以下のような興味のある指摘がある。<sup>④</sup> これは、供述の信用性を弾劾するヒントになるう。

(1) 誘導尋問は、公判廷において禁止されているが、許されている場合もある（刑訴規則一九九条の三第三項各号）。

(2) 誘導尋問禁止の範囲をみると、尋問者に証人が好意を寄せるという心理状態の時、誘導尋問にかかりやすい、逆に、証人が尋問者に敵意を抱くという心理状態の時、誘導尋問にかかりにくい、という前提があるようである。

(3) しかし、証人が尋問者に好意を抱く関係にあるかないかという点は、誘導尋問にかかる危険性のあるなしの決め手とはならない。ちょっとした暗示によっても、すぐ誘導尋問にかかる可能性があるのは、第一に、証人のパーソナリティが、被暗示性の強いものである場合、第二に、情緒不安定、疲労など一時的な心理状態で、しかも法廷でおこり得るような場合、第三に、尋問事項について証人の知識や確信が欠如している場合である。

(4) それでは、どんな内容の質問をすれば、被暗示性の強い人は誘導尋問にかかりやすいかという点、一般には、尋問された事項について、証人のもっている知識が乏しく、かつまたその事項について、証人の自己関与の程度が少ない場合、証人は誘導尋問にかかりやすい。したがって、証人がそれほど関心や熱意をもっていない事項を尋問する場合、暗示を与える手段のうちどれかを選んで尋問の中に含ませれば、誘導尋問にかかりやすいといえる。

(5) 被暗示性は、年齢、性、知能程度、神経症的傾向などのように、かなり持続的要因によって規定されるものである。<sup>(6)</sup>だが、それ以外にも、疲労、眠気、情緒不安定、酩酊の場合など、一時的に変化することもある。また、被暗示性は、対人関係の如何によっても規定されるし、繰り返し暗示を与えることによって亢進することも多い。なお、他人からの暗示に抵抗し、逆の反応をする対抗暗示性というものがある。これは条件の如何に

- よつて、普通だれにでもみられることであるが、とくに緊張病の拒絶症に特徴がある。被暗示性の高い条件として、①脳の異常状態、そのもつとも著しいのは睡眠および催眠状態、ヒステリー症および疲労状態、②暗示される主題についての知識の欠如または確信の欠如、③暗示者のもつ権威または印象的人格、④本人の感じやすい性格と先天的傾向の特殊性、の四種を挙げる学者もいる。<sup>(6)</sup>△傍線は、筆者が付したものである。▽
- 2 「証人がそれほど関心や熱意をもっていない事項」が、有力な状況証拠となったり、供述の信用性を弾劾する重要な手がかりになることは少なくない（こういう事実は、後述するとおり、ウソをつくことにも抵抗のない事実でもある）。

#### 四 反対尋問について

- 1 当事者主義構造の証拠調べが真実発見に資することは明らかである。しかし、そのためには当事者の武器が対等で、十分な攻撃防御を展開できることが前提となる。
- 2 リンカーンの暦事件は、リンカーン大統領が弁護士のとぎに行った反対尋問が奏功し、被告人の無罪を立証した事件として著名である（ただし、後年かなり脚色を加えられたふしがあるという指摘もある）。その内容については、ウェルマンの古典的名著『THE ART OF CROSS EXAMINATION』である（別紙1）「フランシス・L・ウェルマン〔林勝郎訳〕『反対尋問の技術〔上〕』（骨子）の紹介」（以下「ウェルマンの『技術』」という）を紹介がある。

- 3 しかし、この事件においては、①もしもリンカーン弁護士の準備が不十分であったとしたら、②もしも証人がロッキウツドを撃ったのは被告人であるという点のほかは自己の体験した事実をありのまま述べていたとした



ら、③もしも（イリノイの法曹にいわせれば）リンカーン弁護士がトリックを用いていなかったとしたら、④偽証が見破られることはなく、⑤真犯人であった証人は、自己の犯罪を被告人に押しつけることに成功していたに違いない。

4 リンカーンの暦事件は、反対尋問が真実発見に資するもので、被告人を断罪するにはその保障が不可欠であることを示しているが、同時に、供述証拠の危うさを物語っている。<sup>(7)</sup> 神ならぬ身に、反対尋問という法力がくだしかれても、この間の消息に変わりはない。

5 それともう一つ、この事件から学ぶべきことがある。それは、「事実認定者に人を得なければ、すべての努力が水泡に帰する」ということである。ただし、多くの陪審制がそうであるように、「有罪認定には全員一致が必要である」とすれば、たった一人の「人」が確保されればよい。少なくとも被告人は救われよう。

(1) 表現のプロセスで問題になるのは、誠実性 (Veracity) であり、叙述のプロセスで問題になるのは、正確性である。

(2) 村田宏雄『裁判科学』一六三頁以下。昭和四三年に上梓されたこの本の序文には、「ひとり 裁判に科学の手による開発が進まなかった理由としては、この裁判があまりに法のとりでに固く守られているため、科学のメスを加える隙がなかったことがひとつ原因である。だがそれよりもなお大きな原因は、科学者自ら、これをその研究領域の埒外に放擲したことにある。だが、それは、科学者の怠慢である」とある。法律実務家も同罪であろう。なお、同書二六頁には、偏見とはなにか、偏見にはどのような弊害があるか、偏見はどのようにして形成されるかについて、大略、次のような記述がある（番号は、筆者が付した）。① 偏見とは、予めもっているカテゴリーの中に、その性質をたしかめてもみないで他のものを含めてしまうことである。その意味で、オーバーカテゴリーゼーションといつてよい。② 偏見があると、人間は、ありのままに近い形を観察することができなくなる。そればかりか、このカテゴリーには、好悪の感情が附着している。したがって、偏見をもつてものをみると、単にものの真の姿がみえなくなるばかりでなく、さらにそれに理由なく好悪の感情が附着する。これが好意的な感情の場合、多くは問題がおこらないが、偏見が働く場合、理由なく被告人に悪感情を抱き、この悪感情の下、被告人に関する一切が解決される。③ 偏見が形成される理由について、第一に、パーソナリティの欲

求論(偏見とは、欲求不満、罪意識、あるいは他のパーソナリティの欲求に適応しようとする一つの試みで、権威主義的人間の行動も、主としてこのような深く根ざしたパーソナリティの欲求に適応した結果であるとみなされる。欲求不満から攻撃性へという仮説も、結局このなかに包括され、欲求不満の源泉に対して直接の発散をゆるされないところの敵意は、少数者に向けられる)であり、第二は、「競争」理論(偏見は、財貨や社会的地位を狙った集団間の競争から生じる)であり、第三は、偏見は学習されるもので、遺伝的所得的なものではない(偏見は、親の手によって行われるの出発点とする人間の社会化の過程において、固有な規範として要求され、それから逸脱することは、正しい行動様式に背反するものとして非難される)という説がある。4 偏見は、裁判において、次のような影響を与える。第一の原因から生じる偏見は、証人が被告人と親しい関係にある人あるいは被告人が所属する集団に強い欲求不満をもっているが、これらの人あるいは集団に対して無力な場合、力のない状態におかれている被告人に対して働く。第二の原因から生じる偏見は、証人と被告人とが激しい敵対関係や競争関係あるいは利害関係にある場合、証人は相手との競争に打ち勝とうとして、不当に悪意の供述をする。第三の原因から生じる偏見は、証人と被告人の社会的地位に差のある場合に生じるもので、両者の所属する集団の差が、かかる偏見を生む。たとえば、証人の地位あるいは集団からみれば、被告人の地位や集団が軽蔑すべきものであったり、嫌悪すべきものである場合、証人の被告人に対する悪感情にともなうて生じる。

(3) この点については、「覚書」一〇五頁参照。

(4) この点については、「覚書」一〇四頁参照。なお、脳神経科学者の説明としては、「注意のサーチライト説」などが参考になる(田中嘉之「事実認定における予断偏見」、G・ポーネ著(庭山英雄・田中嘉之訳)『裁判官の心証形成の心理学』(二〇〇六年 九二頁)。「脳の視床の中に、意識のレベルを調整しているであろうといわれる視床網様核がある。ここがフィルターのような訳をはたして、注意を向けるある情報だけ通して、残りの情報は抑制してしまう」という(クリック・コッホ・J・Zヤング)。

(5) 尋問者に対する反発から、あえてその期待に反する供述をすることにより、逆の事実への誘導が図られることがある。これは、二重の意味で問題である。一つはその供述が鵜呑みにされることであり、もう一つはその供述の虚偽性の故にその証人の供述全般の信頼性が排斥されることである(後者が、尋問者の狙いである)。

(6) 「たしかに反対尋問には相手方の誤解を訂正効果がある。だがこの制度は相手方(供述者)の判断には誤解がつきものであることを前提とする。その意味で人間一般の判断に対する懐疑主義に根ざしたものである。…法現実主義はその一顕現にはかならない」(庭山英雄「刑事裁判における法現実主義に関する一考察」『裁判官の心証形成の心理学』二〇〇六年 七七頁)。ちなみに、フランク判事は、「裁判所においておこなわれていること、とくにその判決過程を理解するためには、まず一般の人々が、日常身の事件を処理するとき、どのようにしてその判断に到達するのかを観察する

ことから始める必要がある。心理学者のいうところによると、判断の過程が前提から始まり、順を追って論理必然的に結論が導き出されるということとはまれである。普通の場合は、結論から出発し、その後でそれをジャスティファイ（正当化）するような前提を発見しようとする。裁判官の場合も同じである。裁判官も人間であり、通常人と同じように（ごく限られた場合を除いては）（フランク『法と近代精神』八邦訳一九九頁）と説いている。そして、「判決理由はいかにして判決に到達したかについての心理学レポートでなくてはならないという」（W. E. Rumble, Jr., *American Legal Realism* 1986, p. 207）（前記『裁判官の心証形成の心理学』八三頁）。ちなみに、フランク判事は、徹底した陪審廃止論者である。なお、「判断の過程が前提から始まり、……普通の場合は、結論から出発し、その後でそれをジャスティファイ（正当化）するような前提を発見しようとする。裁判官の場合も同じである」という指摘については、若干の留保をしたい。「結論から出発し」というが、裁判官は、その結論が分からないから苦労するのである。「初めに結論ありき」という事案では悩まない。

### 第三 フランシス・L・ウェルマン『反対尋問の技術』について

一 ウェルマンの古典的名著を三〇余年を経て読み直してみると、「さるからさぞ」と頁をくる手が早くなる。本稿で紹介するベテラン実務家の基礎的な素養も、これらによって培われたに違いない。なお、「筆者コメント」は、本稿の筆者が、ささやかな実務経験に照らして記した「補足説明」ないし「感想」である。

二 J・P・ストライカー「古賀正義訳」『弁護の技術』（一九七四年）には、次のような指摘がある。<sup>①</sup>

ウィグモア教授と同じく、彼（フランシス・L・ウェルマン『反対尋問の技術』の著者）も反対尋問が、「疑う余地なく、真実発見のためにかつて発明されたものとも偉大な法的手段である」ことを知っていた。しかし彼はそれを一つの技術と考えていたから、法律家の最も困難な職責において卓越した能力を取得することがいかに困難であるか、ということを知得ていた。反対尋問の技術は、と彼は書いている。「一般に、巧妙な極めた器用さと、論

理的な思考の習慣と、明確な知覚力とを要求する。限らない忍耐と自制、咄嗟に人の心を読みとり、顔を見て性格を判断し、かつさまざまな動機を探知する能力、迫力と精緻さをそなえた行動に出る能力、問題となっている事柄自体について咀嚼しつくした知識、極度の注意力、そうして以上のいずれにもまして、尋問している相手の弱点を発見する本能、こういったものがみな必要である」。△傍線は、筆者が付したものである。▽

そうなると傍線を付したような能力を持ち合わせない弁護人の被告人はどうなるのか。かつて特派員経験のある司法担当記者から、「やっていたらアメリカで…。やっていないのなら日本で…」といわれたことがある。「宜なるかな」といいたいが、他意はない。「特派員経験のある司法担当記者」のほかにも、「著名な刑事法研究家から…」という話はよく聞く。

三 丸田隆『アメリカ陪審制度研究』三二八頁には、「当事者や被害者ばかりでなく、弁護士個性にも陪審員が微妙に反応することが示されている。たとえば、誘導尋問は、一般的に禁止されているが、それをうまく利用することで、陪審員の評決に「impactを与えうる」とある。民事裁判でも、「あの先生があそこまで言われるのだから…」という話はよく耳にする。これが心証形成に影響しないとはいいい切れまい。

四 本稿では、反対尋問の手法について学ぶが、所詮それは技術に過ぎない。絵画でいえば、デッサンの修練である。いかにすばらしい素材・モデルにめぐりあっても、技術がなければ思い通りの絵は描けない。とはいえ、技術があっても、素材に恵まれなければどうしようもない。技術の修得も大切であるが、素材・モデルを確保するための精進が必要である（ラートブルフのいう「法学の知識」と人間と人生の知識千」である）。多くの知識の杭を打ち、専門書や周辺諸科学のみならず、文学、演劇、映画、テレビドラマ等から、貪欲に知識を吸収しなければならない。ちなみに、ラートブルフは、刑事裁判官の資質についてであるが、「だが、これだけは決して十分ではない。温か

い理解に満ちた心と確乎たる指導力こそ不可欠の資質であり、これは養成によつては得られるものではない」とも論じている。裁判員の資質についてはどうであらうか。

五 「ウエルマンの『技術』」の著者は、次のような興味ふかい慨嘆の声を引用し、「弁護士とは区別されるべき証人の立場からの感想を伝えておかねばならない」としている。ウエルマンの精神が健全で、フェアなものであることを物語るものである。ウエルマンが読み継がれる所以であらう。

この世の中には不運な人がずいぶんいるが、それらのうちで、法廷の証人席につかざるをえない状況に追い込まれた人々ほど同情に値し憐憫に値する人々はいない。まず、あなたは、証人席につくよう声をかけられ、羊皮の聖書に手を置かせられるが、その聖書には、宗派が違つてもまにあうように、片方の側にだけ十字架が附けてあり、反対側にはそれがない。あなたは、そのあと、二人の法曹界の紳士から、いろいろ問ひ糾されるが、そのうちの一人は、あなた自身が彼の側についているため、あなたに対して物柔らかに微笑みかけるのに対して、もう一人の方は、まさに反対の理由によつて、あなた方を残忍な目つきで見るだろう。まず、笑顔の方の紳士には、あなたの知つていることを洗いざらい言わせようとかかり、あなたに言わせたかったことを全部言わせてしまつと、あなたをもう一人の紳士の手に委ねるが、この紳士は、まず手始めに、あなたが全然間違つており、みんな想像にすぎないこと、あなたが証言したことは実際に目撃していなかったこと、要するに、あなたが偽証していることを証明しようとする。彼は、あなたが前に刑務所に入れられたことがあるかどうか知りたがり、あなたがそれを否定すると、そんなはずがないという顔をしながら、手を変え品をかえて再三その関係の質問をつづけ、背筋に寒気を覚えさせるような悪い顔をして、十分気をつけてものを言うようにと告げる。彼はまた、あなたが語つた一部始終を誤解していないかどうか、そしてまた、あなたが別の意味のことを言おうとしているのではなかったかどうか、を知りた

がる。こうして、散々に脅しつけて度を失わせ、あなたが言い逃れをしたと陪審に認めさせてから、やつと彼はあなたを解放する。やがて、あなたと対立する立場に立つ人々が次々に証人席につき、あなたが稀代の悪党であり、いくら宣誓していても信用できない旨証言する。そのあと、相手方の弁護士は、総括弁論に立ち、あなたを破廉恥の典型——純潔と貞節に対して反逆を企てている人間——として後世に伝えるにふさわしい人物であるかのように事細かにえがき、そのような企図の断罪に立ち向かう。判事は、その説示にあたつて、もし陪審たちがあなたの証言を信用するならば云々と、あなたの証言の真実性に裁判官として疑念を抱いていることを告げる。そしてあなたは、疑念に包まれた人間として、あなたの妻や家族や知己たちのものへ戻るのである。——そしてあなたは、それとも、あなたが不運にも、たまたまその場に居合わせていたがためなのである。

(1) この本(『弁護の技術』)は、ストライカーの正義感と情熱がほとばしっており、血の沸き躍るものがある。そのさわりを紹介しよう。

私はそれまで幾多の反対尋問を聞いてきたが、われわれの主任弁護士がそのとき始めたもののほど巧みな、そして的確ではなばないものはない。しかし、自由した殺人犯で、しかもその証言に一人の人間の生命がかかっている男に対する主任弁護人の攻撃は、それを一つ一つ咎めだてする判事によって邪魔され、尋問を中断され、ひっきりなしに干渉されたのである。

死刑執行人と異なるところのないその判事の冷酷な洪面に少しもたじろぐことなく、皮肉たつぷりな干渉にもひるむことなく、そしてつづけざまに発せられる「さあそれから？」とか「もっと急いで」とか、あるいは「時間を無駄にしないで」とかいった注意にも物おじせず、勇敢で老練な弁護士にふさわしく、ジョン・マッキンタイアは敢然とつき進んでいった。

彼は反対尋問のすべての面で精通していたが、そのとき彼がしていたことはそのなかでおそらく得意中の得意の事柄であった。つまり、証人が信用するに足らぬことを証人自身の口からいわせて、それによって証人の信憑性を失わせるという技術である。すべての質問が、このならず者の生活の暗黒面をさぐりだし、彼の過去のぶざまな汚点を明らかにし、彼の卑小を、彼の腐敗を、そして彼のおかした数々の犯行をあばいた。すべての質問が、暗黒街の住人であるこの男の正体があるがままにさぐりだそうとするものだった。それは、辛辣な、そしてはなばない努力であった。それは、テンポが早く、一瞬の停滞も見せなかった。彼は鞭をふるうがごとく、質問を浴びせかけた。それは短剣のように鋭く、切り

銛のように捕えて離さず、火銃ライフルのように致命的で、機関銃のように的確であった。そして、証人が攻撃にすくんでしまったり、崩れ落ちる気配を見せたりすると、そのつどゴフ判事が証人に加勢するのだった。

(原審判決から、数カ月後、上訴裁判所(ヒスコック判事)は、ウイグモアを引用して、以下のように述べて、有罪判決を破棄した。)

「過去二世紀にわたり、英米の証拠制度に関する法律政務は、反対尋問による吟味の必要を証拠法の最も重要な特徴とみなしてきた。人の供述の価値を吟味するについてのいかなる保障も、反対尋問の与えるそれに比較すべくもないという確信、そしていかなる供述も(特別の例外を除き)反対尋問の吟味を受け、これによって純化されたものでなければ証拠として用いるべきではないという確信は、永い間の経験を通して、ますます強まってきたのである」と。

(2) ストライカーは、原審裁判官について「死刑執行人と異なるところのない」などといい切っているし、上訴裁判所のミラー判事も「原審公判は、証拠がどうであろうと、ともかく有罪判決を確保しようという意図をもって行われたため……シヨッキングなまでに証拠の重みと喰い違っている」と述べている。

(3) それでは、陪審員の眼に、この裁判官はどう映っていたのであろうか。有能な弁護士なら、陪審員の選任に細心の注意を払っていたはずである。サッコとヴァンゼッティ事件でも、陪審は、セイヤー判事に愛国心を煽られ、致命的な過ちを犯しているが、今回、他に比類をみないような巧みな反対尋問を台無しにし、陪審員の眼を曇らせたものはなんであったのか。

(2) フランシス・L・ウェルマンの前出書二一四頁。なんの帰責事由もない証人に対し、かくまでの不運を証人に強いることが容認されるのはなぜであらうか。

#### 第四 山室恵編著『刑事尋問技術』について

一 検察官の立場から「尋問の一般的手法と留意点」の骨子(九三頁〜九五頁)

なお、【コメント】は筆者が付したものである。



## 1 検察官の主尋問

(1) 落ち着いてゆつくり明瞭に発問する。

《裁判官の交替や上訴審のことも考慮し、公判調書に証言内容を正確にとどめてもらうよう配慮しながら尋問を行う。》

### 【コメント】

① 答えは、質問の仕方によってかなり左右される。あいまいな尋問は、被尋問者に誤解を与え、誤った答えを引き出し、ひいては事実認定者の評価を誤らせる。もつとも、敵性証人については、早口に畳みかけ、考える余裕を与えないような尋問がよい場合もある。

② 間接事実については、案外気楽に肯定的な証言がされることがある。<sup>(1)</sup> それを見逃すと、後になってこれが弾劾され、証言全体の信用性に否定されることがある（第二の三二、第五の二）。敵に塩を送ってしまうことになる。

③ 要領調書の場合のみならず、録音反訳・速記録の場合でも、調書の記載を確認し、場合によっては異議をとどめておく必要がある。語尾が断定なのか推量なのかについても、確認を忘れてはならない。ちなみに、筆者が任官した当時、速記録を読んで付箋（風の足）を貼ることが、左陪席（裁判官主任）の重要な仕事であった。調書を読み直してみると、法廷での印象と異なることがしばしばあった。それは、他の証拠との比較対象として、証言の信用性を判断する時間的ゆとりがあるからである。「法廷で十分心証が採れる」という秀才の話を聞かされると、驚き、自信を失ったの思い出す。<sup>(2)</sup>

④ 重要な答えについては、ダメを押しておくべきであるが、やぶ蛇となることも多い。たとえば、被告人や傍聴人の手前、いいそびれることもあるし、婉曲的な表現や推量（かも知れません）にとどめていることもある。無能な



尋問者（俗にいう「空気の読めない人」）はこの間の事情を配慮せず、証人を窮地に追い込んでしまうことが少なくない。ちなみに、「ウェルマンの『技術』」第6章は、この点について次のように説いている。

私は決してあんなことを言うつもりはなかったです。あの人が私をあんな立場に立たせたものですから、私としては、ありのままのことを言ってしまうなければならなかったのです。でなければ、私が嘘をついていたことを認めなければならぬですね。

(2) 簡潔な一問一答に努める。

《一問一答とは、ただ形式的に問答を区切るだけのことではない。発問の順序の工夫とあわせて、短い時間で、簡潔な、要点をついた答えを引き出し、一こま一こまずつ事件の映像を裁判官の心のカメラにピタリとやきつけさせることである》（新版事実認定五二―五三頁）。

【コメント】

① 証人の供述があいまいな場合どうするか。①時期がはっきりしない場合、関係者の個人的な事柄を基準にして聞くのがよい（オリンピック（万博）より前か後かではなく、「〇年の〇月に結婚しているがそれより前か後か」などといった身近で非日常的なエピソードを基準にする）、②季節がはっきりしない場合にも、関係者の個人的な関心事を持ち出して聞くのがよい（「夏か秋か」とか、「半袖を着ていたか」ではなく、「〇月に子供が生まれているが、それより前か後か」といった聞き方をする）、③「関係者の個人史」を頭に入れておかねばならない。

② 一問一答式は、刑訴規則一九九条の二三第一項の要請でもある。①ただ、一問一答が「裁判官の心のカメラにピタリと映像をやきつけさせる」ことができるのは、事実認定者が、尋問者の供述が信用に値するものであると考えている場合である。「うさんくさい奴だ」と思われたら、「ピタリと映像をやきつけさせる」どころか、レンズの焦

点もしばつてももらえない、②供述の信用性は、知覚、記憶、表現、叙述の各過程で問題となるから、尋問事項を工夫し、事実認定者に証言を素直に聞いてもらわねばなるまい（心のカメラにピタリと映像をやきつけてもらえ）。③ 主尋問においては証人が主役であり、証人をして語らしめるのが鉄則である。反対尋問と違いについては、後述しよう。その意味でも、誘導尋問は適切でない。

④ 検察官は横綱相撲をとればよいが、「検察官側の証人はウソをつかない」と思ってもらえるわけではない。<sup>(3)</sup> 民事訴訟では、信用性を強調するため同行できる証人についてあえて「呼出し」を求めるなどという高等テクニク？を駆使する弁護士もいる。ちなみに、横綱相撲は美学でもあるが、もともと勝率の高い尋問技術でもある。

⑤ 証人テストで、「ありのままを話せばよい。無理に取り繕うな！」と注意しておく必要がある。手練れの主尋問者になると、自方に不利な事実をあえて述べさせることによって、証人がフェアな人間であることを強調する。

⑥ 主尋問者は、自方に好意的な証人が物語りを始めた場合、注意を要する。畳の引き倒しや勇み足を招き、勝負を逆転させてしまう。その意味で、反対尋問者にとっては、好機到来である（「問わずに落ちず、語るに落ちる」である）。

(3) 臨機応変に対応するよう努める。

《証人が予期に反して証人テストと捜査段階の供述と異なるかあるいはニュアンスの異なる供述を始めた場合、気持ち・落ち着・け、弾劾尋問（刑訴規則一九九条の三第二項・一九九条の六）や誘導尋問（刑訴規則一九九条の三第三項・一九九条の六）を的確に駆使して検察官が真実と信ずる供述を引き出すべきである。そのためには、規則に精通しておくとともに、予め予期に反した場合に対応できるような準備をしておき、臨機応変に対処すべきである》。

## 【コメント】

① 証人が被告人等に対する気兼ねや配慮から予期に反した供述をし始めた場合、軌道を修正するための助け船を出さなければならぬ。たとえば、その苦衷を付度し、①証人が捜査段階でも、進んで被告人に不利な供述をしたわけなく、種々の証拠を示された結果、被告人を庇いきれなくなったものであって、被告人を害することを望んでいなかったこと、②被告人あるいはその父親に一方ならぬお世話になっており、大変感謝していたことなどを被告人や傍聴人に示すことにより、被告人に不利な供述をする心理的負担を軽くするような配慮が必要となる。それは、他方で、二号書面の採用のための要件の立証にもなる（ただし、盾の両面となるリスクはある）。証人が被告人や傍聴人に怯えているようなときには、証人が供述することを憚っているという雰囲気や調書に残しておく必要がある（「[問い] 傍聴席が気になりますか。[答え] ……」でもいいから、調書に残しておくべきである）。もとより、検察官は、尋問当日まで、証人とコミュニケーションをとってインカレジしておくべきではない。

② 刑法法二二七条の活用しておくことも必要である。要件を緩和した今次の改正を生かすべきであろう。松川事件などでは、同法二二六条や同条がよく使われている（当時は、予審の延長のような感覚があったのかも知れない）。ちなみに、新聞報道等からの推測に過ぎないが、近時強制起訴になった政治家に関する秘書の捜査段階における供述についても、同条は活用されていなかったようである。

③ なお、被告人の弁護士が元検察官で、開廷前に検察官と親しげに話していたため、「はしごを外され、自分だけが裏切り者にされてしまうのではないか」と不安になったという話を聞かされたことがある<sup>④</sup>。訴訟の関係者は想像できないほどナーバスになっている。修習中、私淑する弁護士から、「裁判所のエレベーターで一緒になっても、依頼者を同道しているときには会釈も慎んでくれ」と戒められたのを思い出す。「先生は裁判官と親しいから和解を勧めるのだろう」といわれるおそれがあるからだという。もともと、逆に、裁判官と親しいことを依頼者に印

象づける弁護士もいる（それが、司法への信頼を傷つける所業であることを自覚すべきである）。

- ④ 証人が予期に反した供述をし始める理由は、以上のような場合だけではない。「隠れた利害関係」の問題として後述しよう。<sup>(5)</sup>

- (4) 異議を申し立てられたら当事者同士で論争しない。

《異議を申し立てられないような尋問事項を用意して尋問に臨むべきであるが、異議を申し立てられた場合、弁護人に対して意見を述べるのではなく、裁判長から意見を求められたら、落ち着いて、自己の尋問が適法妥当であることを明にしなければならない。例えば、「立証すべき事項と関連性がない」（刑訴規則一九九条の三第一項）という異議に対しては「立証事項の前提事実に関連する尋問である」（逐条解説九七頁）とか、「証人の供述の証明力を争うために必要な事項についての尋問である」（刑訴規則一九九条の三第二項・一九九条の六）などを述べることを考えられよう。また、「誘導尋問」との異議に対しては、刑訴規則一九九条の三第三項各号の事由を明らかにし、「意見を求め又議論にわたる尋問」（刑訴規則一九九条の一三第二項三号）との異議に対しては、「証人が経験した事実により推測した事項について供述を求めるものである」（刑訴一五六条一項参照）などの意見を述べることできよう》。

# 【コメント】

- ① 弁護人の異議に対する検察官の意見は、裁判所が異議の適否を判断するため刑訴規則三三条一項に基づいて徴されるものである。説得すべきは裁判所であって弁護人ではない。ちなみに、弁護人は、異議によって検察官の質問の中止・撤回を求めるとともに、それに答えることの不当性を強調し、証人を牽制しようとする。そうなると、エキサイティングなやり取りは、異議が棄却されても、証人に不快感を与え、中立的な証人を敵に回すおそれがない

とはいえない。この点については、無神経な検察官・弁護人が少なくない。

② 弁護人の異議に対する検察官の意見は、裁判所が異議を却下する理由となるものであるから、「異議は理由がないものと思料する」などというものではあまり意味がない。もつとも、結論がはっきりしている場合や「検察官が議論に勝ったため、異議が認められた」という印象を被告人やその支援者に与えない方がよい場合<sup>(6)</sup>はくどくならない方がよい。

③ 誘導尋問は、発問者の期待する答えを暗示している点において、証言の証明力を減殺するおそれがある。狙いどおりの心証形成を裁判所にさせるためにも、誘導尋問は得策でない。前述したとおり、主尋問では証人が主役であり、尋問者は黒子に徹すべきである（ただし、後記第七の六2のLandyらの研究参照）。

(5) 弁護人の異議に対しては柔軟に対応する。

《いたずらに論争することなく、尋問を撤回し、新たに別の尋問に移った方が適切な場合が少なくない。激しい論争に証人が動揺し、尋問のリズムが狂ったり、裁判官の注意が異議の裁定に集中してしまい、本来の心証形成を阻害するおそれがある》。

## 【コメント】

異議に対して尋問を撤回する対応が、鷹揚で潔く真摯な印象を与える場合と尋問の未熟さを感じさせる場合がある。器の問題でいかなともし難い。

## 2 反対尋問に対する対策と留意事項（九五頁～九七頁）

(1) 神経を集中して尋問を聞き、間髪を入れない確かな異議を出す。

《時機に遅れてされた異議申立》は不適法な異議の申立てとして決定で却下される(刑訴規則二〇五条の四)。尋問に神経を集中させてピンときたら、まず異議を申し立て、一呼吸おいて理由を考えて簡潔に述べる。なお、「異議を述べる際及び腰であると、大抵その異議は棄却される。異議を申し立てる限りは、明瞭かつ決然と述べるべきである」(後藤貞人「異議申立て」実務刑事弁護三四一頁)というべきである》。

### 【コメント】

- ① 気色ばんで異議を申し立てると、証人の反感を買い、好意的な供述を引き出せなくなるおそれはない。事案の内容(たとえば、被告人の一生を左右するような重大事件か否か)や尋問事項(たとえば、それが被告人の有罪に直結するようなもの否か)によっても程度は異なるが、尋問者に対し好感をもっているか反感をもっているかにより、供述内容が影響を受けことは否定できない<sup>⑥</sup>。
- ② 敵性証人の場合には、同期の畏友後藤貞人弁護士が指摘するように、「明瞭かつ決然と述べるべき」であろう。まさに「気合い」である。
- ③ もっとも、老獪な弁護人が繰り出す「異議ではありませんが……」といったジャブも、尋問のリズムを狂わせ、相手方の体力を消耗させる効果がある。
- ④ 同じ異議を述べても、居丈高で、反感を買う者もあれば、そうでない者もある。尋問者は、ウィッグ(かつら)だけでなく、観客である事実認定者の好むペルソナ(仮面)をつけて演じ切らねばならない。そのうち、いいお顔<sup>⑦</sup>になってこよう(名優の素顔はいつしかペルソナのそれになっているという)。
- ⑤ ちなみに、裁判官は、異議に理由があるかどうか判断を迷う場合、自己の過ちにより決定的な供述が失われることをおそれる。したがって、「伝聞か非伝聞か」、「伝聞であるとして例外に当たるか」がはつきしないと、「とりあ

えず供述させ、判決の段階でもう一度証拠能力を判断すれば足りる」といった傾向がなくなはない。

⑥ しかし、裁判員にはそんな器用な芸当はできない。証拠として採用されると、待ったなしに心証が形成される。

⑦ 不服申立てではなく（刑訴規則二〇六条）、異議の判断に対する再考を促すため、「意見書（証拠の採否について）」が出されることもある。

(2) 異議は戦略的に行う。

《証人の供述内容・態度等から、相手方の違法・不当な尋問がかえって検察官に有利となると考えられる場合には異議を控えるのが得策である。一方、証人が相手のペースに巻き込まれ、質問の意味を十分理解できなくなり、混乱してきたときには、話の腰を折り、証人に精神的支援を与えるため、軽微な違反であってもあえて異議を出すことが必要であろう》。

## 【コメント】

① 異議を申し立てれば認められるような場合であっても、その供述の信憑性を弾劾する証拠があるようなときや、供述自体が証人の人間性・信用性を疑わせるようなときには、異議の申立てという戦術をとらず、供述をつづけさせ、傷口を広げさせるという戦略をとるのがよい（前述したジョン・マツキンタイアの得意術である）。

② 一問一答式でなく、だんだらと物語りをし始めた場合にも、「問わずに落ちず、語るに落ちる」ということもある。相手がくれたチャンスを自ら潰してはなるまい。

(3) 異議の申立ての相手方は裁判所である。

《前述したとおり、異議の申立ては、裁判所に対する行為である。弁護人に対して直接に異議を申立て当事者間で議論するのは、好ましくない》。

## 【コメント】

前記1の【コメント】参照。

(4) 異議の理由は簡潔に示す。

《反対尋問に申し立てられる異議には、①ないし⑫以下のようなものが多い》。

① 主尋問の範囲外、関連性なし（刑訴規則一九九条の四第一項）。

《①反対尋問は、「主尋問に現れた事項」や「これに関連する事項」でなくても、証人の供述の証明力を争うために必要な事項」についてもなし得る。②弁護人が「証人の供述の証明力を争うために必要な事項」であるとの意見を述べた場合が勝負である。そのような反対尋問がなされることを予め予想していても、あえて主尋問では触れず、反対尋問で争点をそこに引き込み、再主尋問で論破するのもインパクトの強い高等戦術である。》

## 【コメント】

① 「あえて主尋問では触れず、反対尋問で争点をそこに引き込み、再主尋問で論破する」という作戦をとった場合、相手から、「主尋問における言及欠落」を巧みに追及されるリスクがある。再主尋問で論破したつもりでも、「ようやくのことで考え出した言い逃れに過ぎない」と思われたら万事休すである。

② 事実認定者が、いったん心証をとってしまうと、それが「先入意見」となる。ハンス・グロースは、次のように指摘している（「覚書」一三四頁）。筆者が、しばしば「熱心な判事」と皮肉まじり呼ぶのは、以下の記述を思い浮かべてのことである。裁判員は、もともと「熱心な判事」になるおそれがある。

先入意見のいつそう危険なる所以は勉強家にして其の業務に「熱心なる予審判事」の殊に弊に陥り易きに在り機械的に執務せる「冷淡なる刑事家」は概して思を其の關聯事件に凝らさず事の経過を事情に一任する者なれども熱



心に穿鑿考究する者は却て誤認又は過重視するにいたるべき証憑を発見し易く而して一旦之れ憑拠して「意見」を構成すれば復容易に之れ棄つる者非ず<sup>ハ</sup>」<sup>シ</sup>と「下線」は筆者が付したものである<sup>ノ</sup>。なお、シューネマンも、「裁判官はいったん下した予断 (Vor-Entscheidung) に異常に固執する。裁判官がいったん受容した見解を変えさせることは、著しく困難である」としている (第二の注 (3) 引用論文九一頁)。

③ ちなみに、白熱した交互尋問が終わった後、裁判員が挙って漏らした感想は、「あの証人のワイシャツの襟が立っていたね」であつたという (裁判員裁判を多数経験した関係者の話)。こういう話は、絶対に裁判員裁判を担当した裁判官の口からは聞けない。筆者は今、「刑事裁判覚書 (完) —わが国の陪審裁判を素材として—」を執筆中であるが、陪審裁判に関与した関係者の陪審員の資質・能力に関する感想・意見をみると、概して裁判官は、消極的評価をすることに慎重である。

② 誤導尋問 (刑訴規則一九九条の四第四項)。

《誤った方向についての誘導尋問 (誤導尋問) は、直ちに是正を求めなければならない。なお、「誤導尋問」の意義については、「争いのある事実又はいまだ供述に現れていない事実を存在するものと前提し又は仮定してする尋問」という立場 (新版事実認定一六八頁、逐条説明九八頁) もあるが、必ずしもこれに限らない。》

## 【コメント】

① S・Aライスの実証的研究によると、伝染的偏見 (contagious bias) が問題になる。これは、面接者が対象者に与える不当な影響で、面接者の質問方法や言葉遣いの微妙な暗示による影響がある (「覚書」五三頁)。

② 誤導尋問に当たるといふべきか、後記③の相当でない誘導尋問等に当たるといふべきかではなく、いかなる点に問題があるかを具体的に示すことが重要である。

③ 「誤った方向についての誘導尋問（誤導尋問）」でも、戦略的に放置する方がよい場合があることは、既述のとおりである。

③ 相当でない誘導尋問（前同）。

《長々と具体的事実を述べて単にこれについての肯定又は否定を求めるような尋問（逐条説明一〇一頁）や「むりやりに証人を押し込んでこれを反射的に復唱させるような極端な誘導」（新版事実認定一三四頁）などがこれに当たる。また、「証人が反対尋問者に対し迎合的にみえ、誘導の必要性に乏しいと思われるような場合も、誘導尋問として制限することができると解される」とされる。》

## 【コメント】

このような証言は、およそ証明力に欠け無駄であるから、裁判所としても、威嚇的・侮辱的尋問や証人の名誉を害する尋問と同様、異議を待つまでもなく（老獪な弁護士は、相手方が無駄尋問で時間を費消するのをほくそ笑んで見守っているように）、尋問を制限すべきである。

④ 要約不相当（前同）。

《①尋問の要約は、第二に裁判所に対し、証言を再現・強調して、心証形成を促し、第二に証人に対し、証人の供述がどのように評価されるかを示すことにより、以後の尋問に矛盾なきを期するもので（反対尋問の場合は、矛盾を追求するための基礎を固めるもので）あり、第三に書記官に対し、正確な調書記載に資するために行われるものである。②そのため、誤った要約を放置しておくことは、様々な弊害を生じることになるから、是正しておく必要がある。》

## 【コメント】

① 「不相当な要約」かどうかの判断は、証言の評価にかかわり、裁判官としても、その処理がむずかしいケースが少なくない。

② 証人が目の前にいるのであるから、微妙なケースでは、証言の趣旨を確認し、そのやり取りを調書に残しておくべきある（もちろん、それが前言の事実上の撤回・変更か、という問題は残ろう）。

⑤ 仮定又は推測による尋問（前同）。

#### 【コメント】

① 仮定又は推測による尋問は、無用なばかりか、仮定又は推測であるとの認識が希薄になると、その答えが、証人が体験した事実に変容してしまうおそれがある。

② 異議申立てにより、それが仮定又は推測による尋問であることを印象づけておくと、「そのような前提を欠く本件では、逆に、……」といった心証形成を導きやすくしよう。事実認定者としては、「仮定の存否」に気をとられ、「推測の是非」を疎かにしてはならない。仮定による尋問は、それだけで二つの争点があり、因数分解すると、争点は三ポイントで収まらない。

⑥ 発問の趣旨不明確な尋問（刑訴規則一九九条の二三第一項）。

#### 【コメント】

① 証人が趣旨を確認すればよいが、聞きそびれ、適当な答えをしてしまうこともある（第四の一参照）。

② 検察官が異議を申し立てる前に、裁判所が是正を求める方がよい。裁判所に積極的な介入が求められるケースである。

③ もっとも、わざと聞き取りにくい声で質問し、証人を前のめりにさせる（有利な土俵に引き込む）という高等戦

術を用いる手練れもいる。

⑦ 威嚇的・侮辱的尋問（刑訴規則一九九条の二三第二項一号）。

【コメント】

① まず、尋問者は、威嚇的・侮辱的な尋問をしてはならないことは当然であるが、相手がウソを述べていると決めたような尋問も聞きたくない。他人に見せたくない顔（源氏鶏太）の一つである。ルオーの描く裁判官の顔のようにゆがんで見えよう。もちろん、裁判官が補充尋問する場合も同様である。

② 裁判所としては、被告人に不信感や不公平感を与えないよう介入に消極的になり勝ちであるが、積極的な介入が求められよう。ウエルマンも認めるように、証人ほど「同情に値し憐憫に値する人々はいない」（第三の五）。

⑧ 重複尋問（刑訴規則一九九条の二三第二項二号）。

【コメント】

① 有利な証言が引き出せたのと同じ質問を繰り返すことは無意味である。しかし、反対尋問において重複尋問が奏功するケースは少なくない（ただし、集中審理ではむずかしい）。異議申立てがあると制限せざるを得ないが、複数の被告人や当事者にそれぞれの弁護士や代理人がついている場合、事実上重複尋問となる。

② 体験していない事実について行った供述は、創作であるから、それを繰り返すと、思わぬ綻びが出てくる。「重複尋問の効用」である。要証事実との結びつきが密接な事実については一貫性を維持できるが、そうでもない事実について馬脚を現す（山本周五郎『寝ぼけ所長』は興味深い）。風声鶴唳と聞けば、（偽証をしている者には）思わぬ反応も見られよう。「隠すより現わる」である。ちなみに、「書三たび写せば、魚も魯となり、虎も虚となる」いうこともある。それを供述の変遷などと思われてはたまらない。異議申立てはそれを防ごう。

- ⑨ 意見を求め又は議論にわたる尋問（刑訴規則一九九条の二三第二項三号）。

【コメント】

- ① 証人には、その実験した事実により推測した事項について供述させることができる（刑訴一五六条一項）。
- ② 証人が体験したという事実からどのような事実が推測できると考えているかを知ることが、ゴールドン・オルポートのいう「供述のゆがみ」（第二の二）をチェックするうえでも重要である。

- ⑩ 証人が直接体験しなかった事実についての尋問（刑訴規則一九九条の二三第二項四号）。

- ⑪ 伝聞供述を求める尋問（前同）。

【コメント】

- ① 異議申立てがあつた場合、刑法三二四条一項または二項の伝聞例外の要件が満たされなければ、異議が認められる。質問を阻止できず、伝聞供述がされてしまった場合には、証拠排除を求めるべきである（刑訴規則二〇六条の六、二〇七条）。

- ② 伝聞例外の要件の立証をどうするかについて考え方は分かれるが（かつては、野間洋之助「伝聞証言の扱い」判例タイムズ六五二頁が指導的な文献であつた）、特段の事情がない限り、要件の立証を留保したまま伝聞供述を求める尋問は許すべきではあるまい。伝聞供述を求める者は、あらかじめ伝聞例外の要件を立証する準備をしておくべきであろう。そうでないと、計画審理は画餅となる。

- ⑫ 証人の名誉を害する尋問（刑訴規則一九九条の六ただし書）。

【コメント】

- ① 証人の供述の信用性等の判断のため、その名誉を害するおそれのある尋問をしなければならぬ場合がある。

② 裁判所も検察官も弁護人も、証人の名譽を保護するため、できる限り必要な制度を活用すべきである（不運な証人については、第三の七参照）。熱心な判事の登場を願いたい。

(5) 異議申立ての公判調書への記載を確認する。

《異議申立てとその理由は、公判調書の必要的記載事項である（刑訴規則四四条一項一四号）。上訴審で争う余地を残すためであるから、記載の有無・正確性に十分留意しておく必要がある。》

# 【コメント】

最裁昭和五九年二月二九日高輪グリーンマンション殺人事件によると、異議申立てがなければ、「（伝聞供述について）黙示の同意があったものとされ、後に証拠能力を争うことができなくなる」から、異議申立てについて記載漏れがないか、十分チェックしておかねばならない。

(1) 「覚書」一二二頁。ウソをつくことの抵抗感（つきにくいウソとつきやすいウソ）について触れている。

(2) こうした見方は、裁判員裁判制度に対する批判につながるが、後述するように、その制度的価値を否定する趣旨では毫もない。

(3) 「裁判官は検面調書を鵜呑みにする（当事者の「陳述書」程度の扱いではない）」という批判をよく聞かされるが、「裁判官は検察官証人を信用する」という表立った批判はあまり聞かない。

(4) 民事訴訟で、代理人同士がなれなれしくしているように見えたので、裏取引があるのではないかと怖くなったという証人の話を聞いたこともある。

(5) 検察官が弁護人に議論に勝ったから、検察官に有利な判断がされたと思われる、と、弁護人による支援者のコントロールがままならない事案では、荒れる法廷を助長する。「荒れる法廷」は最早死語かもしれないが、……検察官は昼行灯の方がよい。

(6) 前注（1）参照。

## 二 弁護人の立場から「尋問の一般的手法と留意点」の骨子（八四頁～九三頁）

なお、【コメント】は、筆者が付したものである。

### 1 総論的説明

《証人尋問において、尋問者と証人の関係は、比喩的にいえば喧嘩のようなものである。特に敵性証人や真実を語ろうとしない証人の場合、全人格の勝負という側面があり、侮られてしまつては、決して真実の証言を引き出すことはできない。したがつて、まず証人に侮られないように、私（尋問者）は事実をあなた以上に知っているのだ、いい加減な証言は絶対に許さないということを、尋問態度及び尋問内容自体で証人に示すことが必要である。具体的には、当事者しか知らない事実や専門的な事項について十分に準備して正確に把握し、尋問自体に誤りがないようにすることが必要不可欠である。何故なら、証人は事実を体験しているのだから、尋問者がどの程度分かっているかは簡単に判断することができ、全く分かっていない尋問者の尋問に対しては、いい加減でも大丈夫だと安心するからである。究極的には、「経験がものをいう」面は否定できない。ここで経験とは、証人尋問の経験のみならず、人生経験、事象に対する知識、見聞、体験及びこれらのことから培われる経験則のすべてという意味であり、一朝一夕で得られるものではない》。

### 【コメント】

① ここでは、証人尋問が全人格の勝負であり、証人に侮られないよう「当事者しか知らない事実や専門的な事項について十分に準備して正確に把握し、尋問自体に誤りがないようにすることが必要不可欠である」として、知的部分（理）が強調されている。しかし、全人格の勝負には、「人生経験……及びこれらのことから培われ」た人間的魅力（情）も重要である。その点については、後に検討する。

② ラートブルフは、刑事裁判官に求められる資質について次のように説いている（第三の四）。それは法律実務家のすべてに当てはまろう。

裁判官一般について、法学の知識と人間と人生の知識千が必要であると言われる。……ゆえに、これからの刑事裁判官の養成は純然たる法学教育ではなく、刑事技術、刑事心理学、監獄学、そして何よりも各種制度の実際的な知識の修得にまでおよばねばならぬ。すぐれた刑事裁判官にはこれらの条件がすべて必要である。だが、これだけでは決して十分ではない。温かい理解に満ちた心と確乎たる指導力こそ不可欠の資質であり、これは養成によって得られないものである。

③ 尋問者にとって、もっとも必要なのは、「温かい理解に満ちた心と確乎たる信念」である。「ウェルマンの『技術』」第9章にも、「良き公判弁護士たるに必要な凡ゆる属性のうちで最も重要なものは、人を引きつける個人的な魅力である」とある。不運にも法廷に來ざるを得ない人たちの嗅覚は研ぎ澄まされており、本物がどうかたちまち嗅ぎ分けてしまう。

④ それでは、養成によって得られないものを備えるにはどうするか。学ぶことでもない。念ずることである（第一の注（5）、「念ずれば花ひらく」。それが筆者の結論である）。

## 2 証人の立場の違いに基づく総論的留意事項

### (1) 弁護側に好意的な証人

《このような証人には、努めて客観的に、あるいは客観的であると評価されるように証言してもらうことが必要である。そのためには、証人が経験していないことや分からないことについては、無理に証言を求めず、「知らない。



分らない」と明確に証言させる。また、争点に関係がなかったり、重要でなかったりする事項については、あえて被告人に不利と思われる内容の証言が予想されても、その証言をさせておくことも考えられる。なお、証人の信用性について検察官の反対尋問に備え、あらかじめ十分尋問しておくのもよい》。

### 【コメント】

① 無理に証言を求めず、「知らない。分らない」と明確に証言させるのはよいが、その理由を明らかにしないと、被告人に好意的な証人が、供述を避けているととられるおそれがある。一時間を惜しんではならない。

② 証人が被告人に不利と思われる内容の証言もしているという事実は、事実認定者に対し、証人がありのままに事実を述べているという印象を与える。前述したとおり、手練れの主尋問者は、自方に不利な事実をあえて述べさせることによって、証人がフェアな人間であることを強調する（第四の一参照）。

③ 好意的な証人による「最良の引き倒し」ということもある（境界確定訴訟において、審理の結果、えんじゅの木が境界木であることがほぼ明らかになっていたが、原告のために証言台に立った証人は、「えんじゅの木が境界です。ひどいですね。被告は、えんじゅの木はもつと被告の家の方にあつたのに……」などと言ってぶち壊してくる）。

### (2) 中立的な証人

《このような証人には、言葉遣いに注意して、証人の気分を害さないよう注意すべきである。また、主尋問・反対尋問で被告人に有利な証言が出ている場合には、深追いをすべきでない。もつとも、証人が中立であるからといって、証言内容によっては、弾劾する必要がある。なお、答えの予想できない尋問はすべきでない（これがは敵性証人でも同じである）》。

## 【コメント】

① 尋問の途中、なぜか証言のトーンが変わってくることもある。全神経を集中し、その理由（たとえば、傍聴人が入って来たことが影響していないかなど）を探らなければならない。

② 被告人や弁護人の挙措が、証言の内容にかなりの影響を及ぼすこともある。後述する「隠され利害関係」にも思いをいたさなければならない。

③ 弁護人としては、証人の揺れる思いを汲み取って、寄り添い、孤立感や不安感を拭わねばなるまい。

④ 「囲師には必ず鬭き、窮寇には迫ることなかれ」、深追いは禁物である。ダメ押しが仇となるケースもある（第四の一）。

⑤ なお、「ウェルマンの『技術』」第3章には、「輝かしい実績を残したデイヴィッド・グラハムが、『弁護士たる者は、証人に対して、第一に、どんな答えが返ってくるかわかっていないかぎり、ないしは第二に、どんな答えが返ってきて心配ないのではないかぎり、決して反対尋問してはならない』（おそらく冗談であろうが）、といっている」とある。「おそらく冗談であろうが」は、意味深長である。

### (3) 敵性証人

《このような証人に対し、反対尋問の効果が上げられるかどうかによって、事件の帰趨が決まることが多いが、もっとも難しい尋問の一つである。①優しいトーンと厳しいトーンの尋問とを、尋問事項によって使い分け、ときとして逆の組み合わせも考える。偽証する証人は、優しいトーンの際に油断して思わず事実を証言してしまう場合がある。②しばらく沈黙するという尋問方法もある。証人によっては、偽証した場合に尋問者に沈黙されると不安になり、求めもしないのに言い訳を始めることがある。③ときには、答えを待たずにたたみかけるのも有効で

ある。証人にゆつくり考えさせず、真実を吐露させることができる場合がある。④偽証が予想される場合で客観的な手持ち証拠があるときは、尋問当日まで開示せず、反対尋問前に開示して（刑訴規則一九九条の一〇第二項・一九九条の一一第三項）、証人にいきなり示す方法も考えてよい。⑤このように証人は、反対尋問で何をどのように聞かれるか不安に思っており、あらかじめ反対尋問に対する準備をしておくことが多い。したがって、全く関係のない事項から聞き始めて何を聞かれるか分からないという不安を与えたり、冒頭で核心的なことを聞いて安心させ、中間で無関係な長い尋問をし、最後に再び当初の尋問を繰り返してその食い違いを追及するという方法も考えられる。直接経験していない事実は、いくら勉強して覚えてきても忘れてしまうことがよくある。⑥敵性証人については、反対尋問の結果、主尋問の信用性をすこしでも弾劾できれば、十分成功である。』

## 【コメント】

- ① 良質な法廷サスペンスを観ていると、参考になることが多い。一流の作家の台本には、人間の心理を知り尽くした強みがあり、参考になる。単発的な法廷傍聴よりもはるかに効率のよい勉強ができる。
- ② 「太陽作戦でゆくか、北風作戦でゆくか、両方でゆくか」。臨機応変な対応が必要である。
- ③ 反対尋問に対し証人が示したノンバーバルなサインを見逃さず、これを調書にも残す努力をすべきである。
- ④ 証人がエキサイトして、前後の見境なくしゃべり始めれば、好機到来である。問わずに落ちず、語るに落ちることがある。
- ⑤ あまりに非礼な発言があった場合にも、その後ろめたさからか、尋問者に迎合することも少なくない。それを狙った挑発的な尋問もある。しかし、トリッキーな戦術にはそれなりのリスクがある。「技におぼれ」てはなるまい。
- ⑥ 論語に「直躬父を証す」とある。「父の爲に隠す」子には惻隱の情が必要である。心ある裁判員はみている。

### 3 主尋問及び反対尋問時の一般的留意点

#### (1) 検察官の行う主尋問に対して

##### ① メモをとること

《メモする事項は、証言のポイントということになるが、示した証拠の番号や特定に関する事項を記載すると、反対尋問のときに使い便利である》。

#### 【コメント】

① メモをとるため、証人が視界から消えるようなことがあつてはならない。もつとも、敵性証人の場合には、睨み付ける代わりに、目を背けているという高等テクニクもある（証人を不安にさせ、事実認定者には、齒牙にもかけていないというメッセージとなろう。しかし、態度が悪いととられるおそれがある）。

② 手控えの作り方には、様々な工夫がある。倉田卓次判事の「手控え余技」からは学ぶところが多い。ベテランの書記官は、事件の筋を考えてしまうと調書はとれないという。もつとも、裁判官も検察官も弁護士も、有能な書記官である必要はない。

##### ③ 証人の証言態度及び裁判官・検察官の反応を観察すること。

《証人の証言態度のみならず、裁判官・検察官の反応にも注意を払うべきである。被告人・弁護人が証人を凝視することにより、証人に対していい加減な証言はできないという心理効果を与えることができる。裁判官の反応を見ることによって、その心証を窺い知ることができる場合がある。検察官の尋問自体に注意して、違法・不当な尋問に対して異議を述べることは当然であるが、検察官の反応を見ることによって、主尋問が検察官にとって思いどおりに進んでいるか否か判断できる》。

## 【コメント】

① 証人を「凝視すること」が敵意と感じられないようにすることが大切な場合も多い。目を閉じて聞いているのも悪くはない。自信が感じられる。

② 証人の反応や仕草を記録に残す努力をする必要がある。証人が泣いたり、詰まったりしても、調書には記載されない。弁護人としては、反対尋問に際し、「あなたは涙ぐんでいましたが」とか、「傍聴席に途中で入って来た人を知っていますか」とか、「先ほど……との質問に暫く、沈黙していましたが」といった質問をし、それを調書に残しておくといよい。

③ 証人とのノンバーバル・コミュニケーションの効果も考えるべきである（別紙2）「鈴木淳子『調査的面接の技法』の骨子の紹介」参照）。弁護人がうなずいたり、首をかしげたり、視線をそらしたり、凝視したりすることが、証人の心理に及ぼす影響は無視できない。ちなみに、言葉の効果は予測可能であるが、ノンバーバル・コミュニケーションのそれは、予測不能である。

④ もっとも、声を出して笑ったり、こぶしを振るって見せたりすることは厳に慎むべきである。場合によっては、誘導尋問に当たり許されないこともある。事実認定者に対しても、共感を与えるところか、事実認定者に不快な印象を与えてしまう。

⑤ 裁判官や検察官の反応は、人によって異なる。感情を露わにする者もあれば、ポーカーフェースの者もある。投手と打者・走者のようなもので、なにげない挙動から、必要な情報を汲み取らなければならない。クセはウソをつかない（世界の盗塁王の福本さんは、投手のクセを読んで盗塁していたが、三〇〇勝投手の鈴木啓示さんには、騙されたという）。

⑥ ちなみに、「必要な情報を汲み取るためには、感じとることが肝要である。」

⑦ 検察官が書面、物又は図面等を示して尋問しようとするとき。

《証人尋問の際に、書面、物又は図面等を示して尋問するためには、刑訴規則一九九条の一〇ないし一九九条の一・二に規定する要件が満たされなければならない。弁護人としては、検察官が書面、物又は図面等を示す趣旨が不明な場合には、釈明を求めるべきである。そして、示すための要件がない場合はもちろん、証人に不当な影響を与える場合には（刑訴規則一九九条の一・第二項、二〇五条一項）、異議を述べるべきである。》

# 【コメント】

① 弁護人が、法律家として、尋問の内容の正当性について釈明を求めることは、証人のいづまいを正させ、いい加減な言動は許されないと思わせる効果がある。しかし、度が過ぎると、証人の不信を買い、その心を閉ざしてしまいうおそれがある。

② なお、書面等を示す際にも、それに基づく供述が調書にうまく記載されるよう工夫すべきある。その場にいた者には分かるが、記録上明らかでないということがよくある。裁判官の更迭や上訴審も意識しておかねばならない。《検察官が、①立証事項と関連性のない尋問（刑訴規則一九九条の第三一項）、②違法・不当な誘導尋問（誤導尋問を含む。刑訴規則一九九条の第三・五項）、③威嚇・侮辱尋問（刑訴規則一九九条の二三第二項一号）、④重複尋問（刑訴規則一九九条の二三第二項二号）、⑤意見又は議論にわたる尋問（刑訴規則一九九条の二三第二項三号）、⑥証人が直接体験しなかった事実についての尋問（刑訴規則一九九条の二三第二項四号）等、違法・不当な尋問を行った場合には、遅滞なく異議を述べるべきである。経験を積むしかないが、初めのうちは、おかしいと思ったら取りあえず「異議」と言って起立し、理由は一休みしてからゆつくり考えて異議の理由を述べる。どうしても適当

な理由がないときは異議を撤回すればよい。異議が却下されたり棄却されたりするのをおそれてはならない。なお、伝聞供述に対しては異議を述べておかないと黙示の同意があったものとされ、後に証拠能力を争うことができなくなるから注意を要する（最裁昭和五九年二月二九日高輪グリーンマンション殺人事件）。検察官の主尋問に対する異議は、たとえそれが裁判所によって認められなかったとしても、検察官にプレッシャーを与え、主尋問の調子を狂わせるという副次的効果を生じることもある。また、証人が不当な主尋問によって混乱して答えに窮している場合、異議を述べることによって混乱から引き戻すことができる。》

### 【コメント】

① 「異議が却下されたり棄却されたりするのをおそれてはならない」ことはそのとおりであるが、異議申立ての戦略的效果（戦術ではない）を考えるべきである。

② 証人は、それが尋問者に対して申し立てられたものであっても、自分に対して故障が申し立てられていると感じることがある（「ウェルマンの『技術』」第2章の紹介参照）。そうなると、比較的中立的な証人が弁護人ひいては被告人に敵対的になることがある。

③ 事実認定者に対しても、異議を申し立てる弁護人の態度が、不遜に映り、悪影響を及ぼすおそれもなしとしない。逆に、異議が立ちそうなのに申し立てをしない鷹揚さが、好印象を与える（民事の本人訴訟の場合など、とくにそうである）。

④ 検察官が証人に近づいて尋問する場合

《検察官が証人席の近くに居座って尋問を続けることが時折見受けられるが、このような尋問方法は証人に圧迫を与えるから、検察官席にもどるよう要求すべきである》。

## 【コメント】

- ① 近接学等の問題であるが、証人にとって、遠くから厳しい質問をされる方が落ち着かないこともある（別紙2）「鈴木淳子『調査的面接の技法』の骨子の紹介」参照）。大きな部屋の真ん中に置かれた丸椅子に座らされ、面接を受けるときのあの不安である。距離感がフレンドリーな雰囲気奪い、緊張させ、はからいをする余裕を奪う。
- ② 証人が伏し目がちになり出したら、背筋を伸ばし、一度検察官の眼をしつかり見させると、気後れがなくなることもある。そのためには近寄って、「○さん。○さん。（質問を聞く間は）検察官の顔をしつかり見て……」などと声をかけることで落ち着きを取り戻させることもある。自分の味方が、見守っていてくれるという安堵感をもたせなければならぬ。一度、深呼吸をしたり、大きな声を出させるのも得策である（身が屈まり、口先で呼吸を始める、心理的にも追い込まれてくる）。最初に、傍聴席を含め、法廷をしつかりと見回させておくのもよい（スピーチで上がらぬ方法の応用である）。ただし、熱心な裁判官がどこまで見逃してくれるかは疑問である。

## （2）弁護人の行う反対尋問

《反対尋問は、公判において弁護人が行う最も重要な弁護活動の一つであり、訴訟の結論を左右することが少なくない。供述証拠をチェックするために、反対尋問をすべき事項は、以下の「知覚」・「記憶」・「表現」・「叙述」のとおりである》。

## 【コメント】

- ① 本件における供述の意味の重要さやウソのもたらす重大性を上手に伝える必要がある。
- ② 証人が主尋問を撤回しやすいようなストーリーや雰囲気をつくらなければならない。
- ③ 反対尋問に備え、法廷に持参すると便利なものがある（例えば、親の遺産かどうかが争われている事件において、



給料で購入したなどという供述がされた場合、当時の給料や土地代金の相場を踏まえて反論するため値段史年表等が役に立つ。最近では、インターネットを駆使すれば、尋問に役に立つ有力な情報が直ちに入手できるようスマホなるものを持参するのもよい。アズの書物を持たずしてではなく、スマホを持たずして、かも知れない（せっかく、追いつめたのに逃げられてしまう）。

《「知覚」証人の視力、聴力等五感の能力の程度、現場の明るさ、見通し、騒音等の状況、証人の集中度、既知性、対象の特異性、異常の有無、知覚した時間の長短、特に印象に残るべき事情の有無》。

## 【コメント】

① 「覚書」九〇頁以下では、「〔知覚〕の正確さの程度は、第一に知覚する者のおかれた状態へ異常に興奮した状態、精神障害状態か、客観的に公平に知覚しうる状態か」、第二に知覚の対象と位置関係、明るさ、角度等の観察条件によって左右される」（荒川正三郎『証拠の総合的解説』の骨子）としたうえ、専門的知見を紹介し、コメントしている（専門家の文献については、一四二頁以下）。

② 「目は両視すること能わずして明に、耳は両聴すること能わずして聡なり」。されど「目は毫末を見るもその睫を見ず」という。

③ 「昼のお星は目に見えぬ。見えぬものでもあるんだよ」（金子みすゞ）。認知心理学等の知見を修得しなければならぬまい。そして、タゴールの「もっとほんとうのこと」に思いを致さずばなるまい（第1の注⑧）。

《「記憶」証人の記銘力、記憶力の程度、知覚から供述までの時間、特に印象に残るべき事情の有無、記憶に変容を与えるべき事実の有無》。

## 【コメント】

「覚書」九一頁以下では、「犯罪に関する物や行為等を知覚した場合、知覚した者の印象が記憶の保持の面に影響をもつことはいうまでもないが、再生するまでの間にその者がいかなる状態で過ごしたか、また、その再生の状態はどうであったかが再生の面で強い関連性を有している。記憶する者の個人的能力を看過できない」（荒川正三郎『証拠の総合的解説』の骨子）としたうえ、専門的知見を紹介し、コメントしている（専門家の文献については、一四二頁以下）。

《表現・叙述》証人が真摯に証言しているか（真摯性）、あえて記憶に反して証言する理由の有無、誇張・過少的傾向・表現の有無、証人の叙述（表現行為）の正確性、特殊な用語を使う傾向はないか、叙述と真実との乖離の有無、方言など》。

### 【コメント】

「覚書」九三頁以下では、「①供述は、第一に供述する者の表現力と表意意思に左右され、第二に受け取る側の態度によつて異なってくる。②ウソの供述・誤りの供述の原因には、錯誤、誤解、作話、幻覚、作為がある」（荒川正三郎『証拠の総合的解説』の骨子）としたうえ、専門的知見を紹介し、コメントしている。適宜参照されたい（専門家の文献については、一四三頁以下）。

- ① 誤った犯人識別供述のシグナルとして、「①以前に別人を識別したこと、②自信がない旨の表明、③遅れた申告、④容貌を具体的に述べないこと、⑤全体的印象しか述べないこと、⑥報道などによる想定、⑦詳細すぎる描写、⑧顕著な特徴の見落とし、⑨描写と実際の容貌とのくい違い、⑩識別根拠の変遷、⑪他の証人の識別不能、⑫幼児・老人・婦人、⑬迎合証人、⑭プライドの高い証人、⑮その他に、正常者で目撃条件が良好でも」がある（「覚書」一二三頁以下で引用の渡部保夫『無罪の発見』一四三頁以下を紹介している）。
- ①ないし⑮等の問題意識が、いわば百人一首の一枚札のように自然に手が伸びるようにトレーニングしなければ実践では役に立たない。「むすめふ

さほせに」の次は二枚札(うつしもゆ)である。

② いわゆる叙述の関係では、「覚書」九四頁で紹介したとおり、同じ沖縄でも、糸満地方で「クーン」は「来る」であるが、那覇地方で「クーン」は全く正反対の意味の「来ない」であるという。その厄介さは、大山札の比ではない。ジェローム・フランク『無罪』には、「被告人には、多くのユダヤ人の特性である、問いをもつて答えるという習慣があり、『マガイアーを殴ったのか (Did you strike McGuire?)』と質問されたとき、『マガイアーを殴ったつて (I struck McGuire?)』と憤慨して答えた(ため)、陪審が、被告人を有罪にした」という例が紹介されている(先輩裁判官から、「転勤したら土地の言葉のニュアンスを覚えろ」といわれたのを思い出す)。

### (3) 弁護人の主尋問について

《総論的な注意事項は、以下のとおりである》。

《① 事前の証人テストが必要であるが、偽証と疑われないよう、複数の弁護人で面接するとか、証人の了解を得てテストの全課程をテープに記録しておくなどの方法をとるべきである。なお、証人に対し、証人テストが行われることは刑訴規則によって期待されているところであり(刑訴規則一九一条の三)、隠し立てする必要は全くないことを十分理解させておくべきである。主尋問として尋ねる事項については、一つひとつ確認すべきであるが、その答えを覚えてもらう必要はない。そのようなことをしても、反対尋問では同じ事項を別の角度から聞かれるから役に立たない。事実の大まかな流れをつかんでおく方が得策であることを理解してもらうべきである》。

### 【コメント】

① 事前に弁護人と面接したことに言及されたりすると、狼狽した証人が、あたかも偽証を教唆されたような弁解をすることがある。証人テスト等がやましいことではないことを十分理解してもらっておかねばならない(岸盛一・

横川敏雄「新版 事実審理」一八三～一八四頁には、「検察官の公明な態度でピンチをきりぬけた例」として紹介されている。

② 「複数の弁護士で面接するとか、証人の了解を得てテストの全過程をテープに記録してお」けば、証人は、あらぬ疑いを払拭する切り札を手にしており、安んじて証言できよう。

《② 証人をリラックスさせ、普通の会話をするように心がけ、証人を疲れさせないようにする。テンポが早くなり過ぎないように、ゆつくりと、かつテンポよく尋問する》。

### 【コメント】

証人の緊張感は相当なものである。宣誓書を読む手が震えているのをしばしば見かける。あがり症の証人には、しっかり裁判官の顔を見させ、イスに深く腰をかけさせる。場合によっては、ピンチに野手がマウンドに駆け寄るように、証人台に歩み寄って、質問をするのもよい（第四の二三参照）。

《③ 争いのない事実等（刑訴規則一九九条の三第三項一号・二号）については、誘導し、「はい」と答えられる尋問をする。これに対し、ポイントとなる事実については、努めて「証人の言葉」で語らせる。弁護士としては、合いの手を入れたり、不明なところを確認する程度にすることが、証言の信用性を高めるうえで効果的である》。

### 【コメント】

尋問者は、黒子に徹するが、うなずいたり、アイコンタクトをとるなどノンバーバル・コミュニケーションを忘れてはならない（別紙２）「鈴木淳子『調査的面接の技法』の骨子の紹介」参照。「ただ見れば、なんの苦もなき水鳥の足にひまなき」（水戸光圀）が如くにである。

《④ 書面や物を示して、証言を分かりやすいものにする（刑訴規則一九九条の一〇～一九九条の二二）。実況見分

調書や写真がある場合にこれらを用いて証言してもらうと、迫真性及び臨場感のあることが多い。

#### 【コメント】

① 実況見分調書の図面や写真を利用して尋問することに異議が述べられないよう予め同意をとっておくべきである。そのためには、必要な修正を加えたコピーを作成しておくのがよい。手間かけることを惜しんではならない。

② ちなみに、下司の勘ぐりかも知れないが、国選と私選で手のかけ方がひどく違う弁護人を見かける（扶助協会の事件や国選となると、そういった見方を、当事者からもされてしまうことがある）。「あの先生は、起訴状一本主義」だと思われるようになったらお仕舞いである。

⑤ 反対尋問で当然聞かれそうな事項については、前もって主尋問で尋問しておく方が、反対尋問で突然聞かれる場合より混乱が少ないことが多い。ただし、あえて主尋問では聞かないで、反対尋問を誘い、完璧に答えさせる（返り討ち）にするというテクニックもある。

#### 【コメント】

① 反対尋問で責められる争点が広くて守り切れないおそれがあるような場合に、見せかけの弱点を作って攻めさせる作戦である（堅城には、敵が攻め口を選ぶ弱点が用意されている）。「決定的でない事実の存否を真の争点と見せかける」という戦術もある。

② もっとも、証人が尋問者の意図を理解することができないと、支離滅裂な供述をし始め、悲惨な結果となることもある。

⑥ 主尋問の場合には、尋問の言い回しにそれほど気を使わなくてもよい場合が多いので、尋問事項としては、大まかなものの方が使いやすい。スムーズに行き過ぎると、尋問すべき事項を落としてしまうことがあるので注意

を要する》。

### 【コメント】

- ① 主尋問が敵性証人や中立証人の場合には、別途の配慮が必要であることは既述のとおりである。中立証人の場合、不注意な言動によって、「敵を味方に変えてしまう」。
- ② なお、いわゆる「無言の反対尋問」が奏功することもあるが、「ウエルマンの『技術』」第7章には、「無言の反対尋問ともいうべきやり方を用いると、案外、陪審の心理に不思議な効果を及ぼす。……まず、反対尋問するつもりであるかのように、すつくと立ち上がる。すると、証人の方では決然とした表情で尋問者の方に向きなおり、最初の返答で尋問者を粉碎してやろうと身構えるであろう。これが手掛かりとすべき信号である。信号が出たら、一瞬躊躇の色を示さなくてはならない。そうしておいて、愛想よく、しかし恰も彼女に質問してみても徒労に終わるのではないかと案ずるような思い入れで、彼女の方をじっと見つめ、それから腰を下ろすのである。つまり、これだけのことを名優さながらに演ずれば、陪審に対して、「どうしようもないじゃないですか？ 相手がご婦人ではね」と語りかけるだけのことはしていることになる」とある。ただし、外連味が無いとはいえない。歌舞伎者と眉を顰められるかも知れない。
- ③ 主尋問の上塗りのように見えても、証人が体験していない事実を述べている場合には、どこかに虚偽の徴表が残される可能性がある（第四の二二）。無駄な「上塗り」をしただけで有害とまではいえないと割り切って、反撃を糸口を捜すのも悪くない。

### 三 尋問技術各論について

以下の尋問が検討されている。紙数の関係で、簡単に筆者の見解を述べておこう。

#### 1 自白の任意性を争う尋問について（九九頁以下）

##### 【コメント】

- ① わが国の刑事裁判において、「自白の任意性」のための審理が多くの比重を占めている。
- ② 取調べが可視化されれば、かなりの争いが解消されよう。
- ③ しかし、虚偽の自白がなされる理由の多くが、不当な取調べや長期の身柄拘束にあるとみるのは危険である。この点は、かつて三宅正太郎裁判官が「自白の価値の三思三省せざるべからず」と戒められたところである<sup>1)</sup>。
- 2 伝聞例外の適用をめぐる尋問について（一一八頁以下）

##### 【コメント】

刑訴法三二四条一項に基づいて被告人の供述あるいは同条二項に基づいて被告人の供述以外の者の供述を求める場合にそれが伝聞供述に当たるときは、それぞれの要件を満たす必要がある。その場合の手續については諸説ある<sup>2)</sup>が、そのような事態を招かぬような公判準備が必要である。

#### 3 いわゆる二号書面の取調べを申請するために必要な証人尋問の方法について（一二三頁以下）

##### 【コメント】

従来の方法については、改めて説くほどのことはないが、裁判員裁判が導入され、公判中心主義の徹底を図ろうとすると、二号書面の採用は厳しくなろう（松尾浩也・岩瀬徹「実例刑事訴訟法Ⅲ」四一頁以下）。刑訴法二二七条の改正

なども、それを見据えてのことである。同条の書面はもつと活用されるべきである。

#### 4 目撃証人に対する尋問について（一四二頁以下）

#### 【コメント】

この点については、「覚書」一一二頁以下で指摘したとおり、周辺諸科学の知見を参考にする必要がある。

5 「被害者に対する尋問について」「年少者証人に対する尋問について」「共犯者に対する尋問について」「専門家証人に対する尋問について」「外国人事件における尋問について」の紹介は割愛する（「ウェルマンの『技術』」参照）。

（１）「覚書」七七頁以下。

（２）伝聞例外を主張して伝聞供述を求める予定があるのであれば、公判準備の段階でその趣旨を明らかにしておくべきである。前出・野間「伝聞証言の扱い」参照。

### 第五 日本弁護士会編『法廷弁護技術第2版』について

#### 一 弁護人の主尋問

#### 1 目的はなにか

《①ケース・セオリーを語らせる場合の主尋問は、弁護側のケース・セオリーを証人に語らせるのが原則である。

②これに対し、検察官のストーリーを弾劾する場合の主尋問は、相手方のケース・セオリーを弾劾するために行われる場合もある》。

なお、【コメント】は筆者が付したものである。



## 【コメント】

① ケース・セオリーとは、当事者の一方からする事件についての説明である。それは、①その当事者の求める結論を論理的・法的に導くものであり、かつ、②すべての証拠を説明できるものであつて、その説明に矛盾のないものでなければならぬ、③「何が起つたか」、「それはなぜ起つたか」、「どうして被告人の主張が勝訴すべきか」を明らかにするものである（同書一八頁）。

② 検察官のケース・セオリーやストーリーは、証拠の不備を補う推論の役割を果たす。それに対抗するためには、もう一つのケース・セオリーやストーリーを示すが必要になる。

③ 弁護人は、ケース・セオリーをできる限り短く（おおむね一分間で表現できるように）まとめておくべきである（同書一九頁）。

④ ケース・セオリーは、いわゆるアナザー・ストーリー（検察官側のそれと対置されるストーリー）と同義ではない（同書一九頁）。

⑤ 「ケース・セオリーを短くまとめることの必要性は、裁判員裁判では一層強くなる（ちなみに、新聞の社説が二本から一本になると、読む者は激減すると聞かされたことがある）。耳で聞いて議論することの危うさでもある。テレビ討論会でも、テープにおこしてみれば、いかに論理的にかみ合わない議論を闘わせているかよく分かる。

## 2 どの順序で訊くか

### (1) 自己紹介

《証人が共感できる人物であり、その話が聞くに値するものであることを印象つける。そのためには、誘導尋問（規

則一九九条の三第三項一号）によらず、証人に語らせるべきである。』

## 【コメント】

① 事実認定者は、必ずしも合理的な理由に基づいて、証人が信用するに足る者であるか否かを判断しているわけではない。予断と偏見が入り込む余地が大いにある。人は、論理だけで説得できるものではない。服装をはじめ、その挙措のすべてにも気を配るべきである。事実認定者は、さりげない言動等から、証人の価値観、人柄、ひいては信用に値する人物であるか嗅ぎ分けてしまう。敬語を使ったか、君づけにしたか、相手方や尋問者から目をそらしたか、どんな服装をしていたか、それらが皮膚呼吸される（別紙2）「鈴木淳子『調査的面接の技法』の骨子の紹介」参照）。

② 証人が共感できる人物であるとともに、尋問者もそうであることを印象づける必要がある（第七の六2参照）。

③ 尋問者が胡散臭く思えると、証言までもが怪しくみえる（前同書）。

④ なお、語り口等によっても人柄がにじみ出てくるから、争いのない証人の生い立ちや経歴でも、自らの言葉で語らせるのがよい。ただし、自画自賛は見苦しい。

⑤ 弁護人としては、供述心理学等の知見を駆使する必要がある。

(2) 導入

『証人が語るべき主題を明らかにする。「見出し」をつけるのがよい』。

## 【コメント】

① なんの話か分からないと、頭に入らないし、腹に落ちない。時系列に従って聞いているのか、事柄に注目して聞いているのか、はつきりしていると分かりやすい。

- ② ストーリーを植え付けるには、事実認定者をデジタル思考（二進法）にして、先読みさせるのがよい。ただし、事実はアナログである。見るより、聞くより、感じることに、したがって感じさせることの大切さを忘れてはなるまい。

(3) 舞台

《証人が語る物語は、物語の舞台とそこで展開される動き（動作）に分けられる。多くの場合、この両者は分けて尋問した方が分かりやすい。まず、舞台を聞いて、次に、動作を聞く。図面や拡大写真を利用する（刑訴規則一九九条の一二第二項）などして、動作が行われる舞台のイメージを事実認定者に抱かせるのもよい。なお、ビジュアル・エイドを使う場合には、証人に示すことについてあらかじめ相手方の同意（刑訴規則一九九条の一二第二項、同条の一〇第二項）を得ておくべきである》。

【コメント】

① 事実認定者に舞台を頭に描いてもらうためには、ビジュアル・エイドを用いるに如くはない。「百聞は一見に如かず」である。もともと、ビデオで見ると、実物を見るのとでは、驚くほど印象が違ふことがある。言葉との組み合わせが重要である（ビジュアル・エイドには、時間的・空間的な制約がある。似顔絵は、ビジュアル・エイドであるが、言葉であり、時間的・空間的な制約から自由である）。

② 図面を示すことが誘導に当たることがある。相手方から異議がでないような図面等の準備が必要である。

③ 民事で建築瑕疵が問題になるケースなどでは、模型が役に立つ。素人は、設計図面から三次元の空間を想像できない。航空写真を立体視できないのと同様である。尋問者が汗をかいていることを示すこともできる。

(4) 動作

《舞台ができたらいよいよ動作（アクション）》である。目撃証人の場合は、他者の動作をカメラで捉えるのに例えることができる。専門家証人の場合は、証人自身が動作を行う。いずれの場合も証人と事実認定者を同化させることがカギである。目撃証言の場合は、事実認定者をカメラそのものにする。》

# 【コメント】

① 動作は言葉で表現するよりも、動作で再現する方がリアリティがある。事実認定者をカメラそのものにすることができる。もともと、（目撃証人の場合の）動作には、言語以上にゴールドン・オルポートの平準化、強調、同化がある（第二の二）。それが裏目に出ることも忘れてはならない。

② 動作を調書に記載するのは難しい。いかにうまく表現しても、実際に目で見た印象と調書から受けるそれとがずいぶんと異なることが少なくない。

(5) 予告としめくくり

《初頭効果と新近効果を考える。初頭効果を生かしつつ裁判員（裁判官の場合には、公判前整理手続が先行している）の注意を証人に引き付けるためには、自己紹介の尋問に入る前に、証人が語ろうとする物語の予告を述べてもらうのがよい。そうすると、主尋問の順序は、「予告→自己紹介→導入→舞台→動作」となる。》

# 【コメント】

① 初頭効果（primacy effect）とは、「人は最初に示された情報（第一印象）をよりよく思い出す」という原則をいう。新近効果（recency effect）とは、「ある話題について耳にしたことのうち、最後に言われたことが最もよく記憶に残る」という原則をいう。書齋で記録を読んで心証をとるのと違い、公判で心証をとるとなると、初頭効果や新近効果は侮れない。なお、「Rule of three」により、「ポイントは三つあります」と最初に断ると、初頭効果や新

近効果が三点に波及する」(第五の二一)という。また、次の話題に移る時に、「次は、三つのポイントのうちの第二ですが」と断ることも大事であるとされる。書面では、「第一」、「二」、「(1)」などと明示される(一覽性がある)が、口頭ではそれがままならないので、工夫が必要となる。

② 裁判官時代、オーストラリア(シドニー・メルボルン)とニュージーランド(クライストチャーチ)の裁判所で、陪審裁判を傍聴する機会を得たことがある。その際、陪審員の緊張感をいかに継続させるか、が重要であると感じた(もとより、まったくささやかな体験に過ぎない)。初頭効果や新近効果が期待どおりに生じるためには、尋問者において声色や音量を変えたり(小声で聞き耳を立たせるような手法もある)、立ち位置を移動することなど必要である。書面では、ゴチックにしたり、下線を引いたりするが、口頭ではそれができないので、声色や音量を変えたりするなどの工夫が必要となる。

### 3 どう訊くか

(1) 証人にスポットライトを当てよ。

《反対尋問は弁護人と証人の勝負であり、上質な反対尋問を見ている事実認定者は、弁護人が次に何を尋ねるか身を乗り出す。弁護人と事実認定者とのアイコンタクトを通じ、共感しなければならぬ。これに対し、主尋問の主役は証人であり、弁護人は脇役にすぎない。事実認定者が共感すべきは、弁護人ではなく、証人自身である》。

#### 【コメント】

① どうせこの証人は、「主尋問者の筋書きどおり答えるのだろう」と聞き流されてはたまらない。黒子に徹すべき尋問者は、主役の証人に事実認定者である観客を惹きつけなければならない。よい演技は、あらずしは分かっている。

ても、心を揺さぶる。観客は、感動する名場面を今かいまかと待ち構えているよう。

- ② 黙っていても、裁判官に向けて訴えかけてくる証人もいるが、裁判官や裁判員の方でなく、尋問者の方を見て供述する証人も多い。尋問者としては、事実認定者に向かって供述するよう助言すべきである。もともと、一点を見つめて供述する姿が、控えめで誠実な印象を与えることもある（供述を録取する書記官や速記官への配慮をしなくてもよいのであれば、なにも事実認定者に語りかけなくてもよい。後ろ姿の演技というのものもある）。

- ② メモを見るな、証人を見よ。

《セリフを読み上げたような問いと答えでは、事実認定者の共感を得られない》。

## 【コメント】

- ① 「インタビュー」や「カウンセリング」の鉄則である。尋問者は、良質な「インタビュー」でなくてはならない。
- ② もともと、敵性証人に対しては、尋問者が職業人として被告人と一定の距離をとっており、証人の供述を虚心坦懐に聞く用意があることを示すため、諳んじているような聞き方をするのではなく、メモを丁寧に読み上げて質問する方がよい場合もある。

- ③ 誘導するな。

《効率を優先し、尋問時間をできるだけ短くしたい裁判官の中には、争いのない事項については、規則一九九条の三第三項但書第二号に基づいて、できるだけ誘導尋問を行って時間を節約すべきだと主張する人がいる。しかし、主尋問の目的が事実認定者の共感を得ることにあるとすれば、このような考えに与すべきではない》。

## 【コメント】

- ① 事実認定者は、思わぬところから、心証をとることがある。誘導尋問によって得られた答えにはそれがない（第

五の一(二)。事実認定者にも皮膚呼吸させるよう、酸素の取り入れ口を広げなくてはならない。もともと、丸田隆『アメリカ陪審制度研究』(第七の六一)三三八頁には、「たとえば、誘導尋問は、一般的に禁止されているが、それをうまく利用することで、陪審員の評決にimpactを与えうるといふ。それによると同一事件で、誘導尋問によって偏見を与えられた陪審は、四一%の効率で被告人を有罪とし、誘導尋問のない場合の二・二%を大きく上回っている」とある。

② 「裁判官はなんで分かってくれないのか」との嘆きは、証人や本人との接触時間・度合いの違いにある(民事事件の場合、ベテランの代理人は、弁論準備や和解手続に当事者や証人を連れて行き、「裁判官に皮膚呼吸させる」という)。

③ 民事裁判では陳述書が多用され、主尋問はその成立の立証程度にとどめ、反対尋問でその信用性を弾劾させるといふ審理を見かける。しかし、密度の濃い主尋問が行われている場合の方が、心証をとりやすいことは明らかである(主尋問は、ある意味で反対尋問に対するリハーサル・誘導の役割もあるから、それが事実上端折られると、不勉強な証人は馬脚を現す)。

(4) 証言をコントロールせよ。

《証人は作家でも落語家でもない。ケース・セオリーを証人に語ってもらうためには、適切なガイドとなる尋問を挿入し、証人が語る範囲を限定する必要がある》。

## 【コメント】

① 尋問者が戯作者であり、証人が役者である。尋問者が作った物語を、証人をして語らせるのである。舞台裏が見えては興ざめである。黄門様流に言えば、苦もなく見える水鳥が証人であり、水面下のひまなき足が尋問者である。

う（第四の二）。

② そのためには、主役の証人に台詞を十分暗記させておかなければならない。漱石先生の台詞では、「アイ ラブ ユー」は、「我は汝を愛す」ではなく、「月がとっても美しい」である。

③ アドリブは無用である。不用意な一言が、せつかくの筋書きを陳腐なものにしてしまう。鼻眞の引き倒しである。

(5) 語尾にバリエーションをつけよ。

《事実認定者の注意を持続させる工夫が必要である。ただし、あくまでも弁護人は、背景に徹すべきである》。

## 【コメント】

① 物語の世界に引き込むには、セリフの棒読みではだめである。そのために尋問者は、さまざまな工夫（舞台装置）が必要である。語尾にバリエーションをつけたり、声をひそめたり、強めたり、間をとったりすることにより（ただし、あくまで証人が主役である）、語り部に照明を当て、供述にバリエーションをつける。

② 証人の思いは、抑揚のない平板な言葉だけでは伝わらない。もともと、淡々と語られればこそ伝わる思いもある。泣いたり、喚いたり、心を打つわけではない。名優は、後ろ姿で演技するという（芥川比呂志）。

(6) 問いは短く、一つの質問で事実を訊け。

《証人の答えに注目させるため、問いはできるだけ短くする。一つの問いで複数の事柄を聞いてはならない。二重否定質問は避ける》。

## 【コメント】

① 問いが長いと、黒子である尋問者が目立ち、事実認定者を物語の世界に誘えなくなる。

② なお、二重否定質問は、肯定的な供述を引き出すための婉曲的な修辞法でもある。いずれにしても、答えの趣旨



が誤解されないような配慮が必要である。

(7) 重要なことは繰り返し返せ。

《重要なポイントは繰り返し証言させて印象に残るようにする。ただし、単純な繰返しはわざとらしいし、重複尋問は異議の対象（刑訴規則一九九条の二三第二項二号）となる》。

### 【コメント】

せっかくの証言を事実認定者が聞き流してしまうのを防ぐための工夫の一つである。ただし、やりすぎると、尋問者と証人の「出来レース」のようにとられ、逆効果になることもある。なお、要領調書の場合には、作成された調書の点検を怠ってはならない。ただし、体験していない事実について、重複尋問をすると、思わぬ綻びが生ずる。

(8) ビジュアル・エイドを使え（刑訴規則一九九条の一二の活用）。

《あらかじめ相手方に閲覧の機会を与え、裁判長の許可を受ければ、証人の証言を明確にするために、図面、写真、模型、装置等を利用して尋問を行うことができるが（刑訴規則一九九条の一二）、裁判員裁判では、いままで以上にこの方法を積極的に活用すべきである》。

### 【コメント】

① 事実認定者が複数いる場合（とりわけ裁判員裁判の場合）、見る者の角度によって、印象が異なることがあることに注意を要する。あたかも時代劇で、刀が空を切っているのに、当たって見えるようなものである。もともと、各自がモニターを見ている場合は問題なからう。

② ちなみに、写真やビデオに映し出されたヴァーチャル・リアリティ（ほとんど本物）と本物との違いにも留意すべき点が多い（第四の一・二・三参照）。

(9) 弱点を説明せよ（自己矛盾供述の説明）。

《どのような証人にも、弱点一つや二つはある。その弱点が主尋問ではまったく触れられず、反対尋問で突然登場することになることは避けるべきである。主尋問で触れなかったことがアンフェアだと思われる危険がある》。

【コメント】

① やや高等技術であるが、証人が十分対応できると予測できる場合、いきなり証人に答えさせる方が、説得力に富むことがある。最初に聞いてしまうと、あらかじめ言い逃れ方法を打ち合わせてきたようにとられるおそれがない。堅城には、敵が攻め口を選ぶ弱点が用意されている。孫子の兵法である。しかし、裏目に出ることもある（第四の二〔総論の説明〕 3(3)参照）。

② 相手に一つの弱点を攻めさせて兵糧を使わせ、もう一つの弱点をカバーするという作戦もある。判決を読んでみると、「戦いやすい戦場に誘導されて苦戦を余儀なくされた」事件もある。裁判官が、「決め手をつかんだ」と思うと失敗するのと同様である。

二 弁護人の反対尋問(1)

1 目的はなにか

(1) 「活かす」 反対尋問

《相手方の証人だからといって、こちらに不利な事実ばかりを語るとは限らない。例えば、①こちらのケース・セオリーを支える事実、②相手方のケース・セオリーを弱める事実、③こちらの証拠の信用性を高める事実、④相手方の他の証拠の信用性を減殺する事実を引き出すこともできる》。

## 【コメント】

- ① 証人が善意の間違いをおかしているのか、それとも偽証をしているのか。そのいずれかによって、反対尋問のやり方は、おのずから異なってくる（「ウエルマンの『技術』」第2章）。まず、これを見分ける必要がある。
- ② 敵性証人から導き出された事実からの推論は、説得力が倍加する（準備書面を読んでも、目をひく）。
- ③ 尋問者にとって好ましくないように思える事実でも、他の事実を考え合わせると、有利な事実に変わることもある（第一の一）。頭を柔らかくにして、「活かす」尋問にしなければなるまい。

## (2) 「殺す」反対尋問

《証人の証言の信用性を減殺するための尋問である。これには、①証人が信用できないことを示す事実、②証言の内容が信用できないことを示す事実がある》。

## 【コメント】

- ① 「ウエルマンの『技術』」第6章にも、「不誠実な証人の反対尋問を行う場合には、その手順がものをいう。大事な質問は、やみくもにすべきではなく、証人がその事実を突き付けられたときに否定も弁明もできないようにお膳立てをしたうえで質問すべきである」とある。「手順」を間違えると殺し損なうのは、烏鷲を競う場合と同様である（大局を見て、無理に殺しにゆかない）。

- ② 知覚↓記憶↓表現↓叙述の各プロセスに着目すれば、「その事実を突き付けられたときに否定も弁明もできないようにお膳立て」ができる。

## (3) 対象の限定 (Rule of three)

《尋問を開始する前に、「活かす反対尋問」と「殺す反対尋問」のターゲットを確定しておかねばならない。それは

発見と選択のプロセスである。トピックは、最も重要なものの三つに限定する（「Rule of three」）のがよい。》

## 【コメント】

- ① 事実認定者に対し、反対尋問のターゲットを予告しておかないと、せっかくのクリーン・シュートも見逃されてしまう。ただし、外堀を埋めてから本丸に迫る場合には、ひとひねりが必要である。
- ② 既述のとおり、「ポイントは三つあります」と最初に断ることが肝要である。そうすると、初頭効果や新近効果が三点に波及するという（第五の一・二）。
- ③ いずれにしても、目一杯に主張するのは得策でない。「石はその裾を少し埋めておく」と大きく見える。さほど重要でもない事実まで理由づけに挙げると、かえって説得力がそがれてしまう。

## 2 どう行つか

- (1) 尋問者の「語り」に注目させよ。

《主尋問の主役は、証人であるが（物語を語るのは証人ある）、反対尋問では正反対である。反対尋問の主役は、弁護人である（尋問で物語を語るのは弁護人自身である）。弁護人は、証人とともに事実認定者の視界の中心に立つ必要がある。》

## 【コメント】

反対尋問は、事実認定者を彼岸から此岸に引き戻す作業である。舞台を反転し、背景の異なる別の空間に観客を招き入れなければならない。主尋問では黒子であった者が、主役と渡り合うことを求められる。ちなみに、北野武監督によると、映画ではズームアップにより監督の意図が明確に伝えられるが、舞台ではそれが困難で観客に委ねられて

いるという。法廷は舞台である。困難な作業（ズームアップ）をどうするかである。

(2) メモを見るな、証人を見よ。

《反対尋問においては、証人の動作や表情を見守る必要性が主尋問よりずっと高い。メモを見ては、それも叶わぬ》。

### 【コメント】

① 反対尋問の主役は、弁護士である。主役がセリフを憶えていなくてなんとしよう。

② メモが格好の小道具となることもある。尋問者が手にしている朱の入った膨大なメモを見て、おそれいった証人もいる（ベテラン弁護士の話）。

(3) 誘導尋問をせよ。

《反対尋問は、証人からなにかを教えてもらう手続ではない。反対尋問で語るのは、尋問者であり、尋問者は証人を完全にコントロールしなければならぬ。反対尋問の目的は、弾効ストーリーを支える一つひとつの事実を証人に認めさせること、あるいは、それを拒否する証言が信ずるに足りないこと事実認定者に示すことである。オープン・クエスチョンが許されるのは、答えが分かっているか、どんな答えでもよい場合である》。

### 【コメント】

① 反対尋問の目的が、「弾効ストーリーを支える一つひとつの事実を証人に認めさせること、あるいは、それを拒否する証言が信ずるに足りないことを事実認定者に示すことである」ことに異論はない。いったん発せられた言葉を否定するのは難しい。駟（四頭立ての馬車）も舌に及ばずという。

② しかし、不相当な誘導によって「弾効ストーリーを支える一つひとつの事実を証人に認めさせ」ても、弾効ストーリー

「は強固なものではない。やはり自分からいわせた方がよい。再主尋問でも、「勘違いでした」とか、「（相手方の）先生がおっしゃるので、ついつい考えもせず、ハイ、ハイといってしまう」とかという弁解をされると、空中戦になってしまう。

③ ちなみに、「尋問者に証人が好意を寄せるといふ心理状態の時、誘導尋問にかりやすい、逆に、証人が尋問者に敵意を抱くという心理状態の時、誘導尋問にかりにくい」という前提には問題がある。「他人からの暗示に抵抗し、逆の反応をする対抗暗示性というもの」もある（第二の二一）。この国の証人が、「場の倫理」を形成したがる」ことも忘れてはなるまい（この点については、同志社法学登載予定の別稿「民事裁判覚書―和解を中心として」で論じている）。

(4) 一つの問いには一つの事実

《問いは、一つの具体的事実を認めさせるためだけのシンプルなものにすべきである。複合的な質問をすると、証人に対するコントロールが弱くなる》。

### 【コメント】

① 複合的では、ピン止めが不十分にもなる。

② もっとも、全く突破口が見出せない場合には、証人を混乱させ、はしなくも真実を語らせるといふ奇策もある。「隠すより現わる」である。一点ずつ聞くと、間違ひなくウソをつき通せるが、少し複雑になると、体験していない事実を矛盾なく説明するのは難しい。ルカによる福音書にも、「秘密にされているもので明るみに出されないものはない」とある。

③ 時系列に従わない、脈絡のない質問に対してウソを突き通すのは至難の業である（まさに「ウソの階層性」であ

る)。ただ、このような質問の仕方は、事実認定者を混乱させるから、うまく要約し、せつかくの収穫を埋もれさせてはならない。

(5) 答えの分からない質問をしない。

《証人に対するコントロールが弱くなるからである。六割以上の確率で、こちらの意図する答えが得られる見込みがなければ質問してはならない。もっとも、こちらの意図に反する答えが予想される場合であっても、事実認定者がその答えを信用しないと思えるときは、質問してもよい》。

【コメント】

① 「ウェルマンの『技術』」第3章にも、既述のとおり、輝かしい実績を残した弁護士が、「弁護士たる者は、証人に対して、第一に、どんな答えが返ってくるかわかっていないかぎり、ないしは第二に、どんな答えが返ってきても心配ないのでないかぎり、決して反対尋問してはならない」といつているとある。しかし、やぶ蛇を恐れず、一発逆転を狙わなければならないケースもある。一見不利な供述でも、証人が事実に対することを述べておれば、どこかで破綻する。

② ただし、「牡蠣を食べてはいけない月ですが」まで念を押してしまつてはならない。ホタテを食べたという、弁解を招き、空中戦になる。

③ The best never asks a question if dose`nt already knows answer. He comes prepared へ『評決』バリー・リード。

④ 「意図する答えが得られる見込みがな」いからといって質問を避けても、件の「熱心な判事」のお出ましがある。サッカーなのにラクビーのルールでプレイされてはお手上げである。

(6) 初頭効果・新近効果、ビジュアル・エイドを使え。

《反対尋問においても、初頭効果・新近効果、ビジュアル・エイドの利用を考えるべきである》。

## 【コメント】

① 裁判員裁判の導入により、その必要はいっそう高くなったといえよう。

② しかし、「そんなことで結論が左右されるのでは？」とか「真実の意味が変わったのでは？」という陰の声もする。

## 三 弁護人の反対尋問②

### 1 反対尋問における弾劾

《証言を弾劾するにはどうすればよいか。その証言に「矛盾」があり、信用に値しないことを示せばよい。それでは、証言の信用性を減殺する矛盾とはなにか。その一つ目は、その証言が内部において矛盾していること、すなわち供述に自己矛盾があることである。その二つ目は、その証言が外部との関係で矛盾していること、すなわち他の証拠や客観的事実と矛盾することである》。

## 【コメント】

① 供述の信用性を判断する手法については、既述（第二の一～四）のとおりであり、詳しくは、「覚書」で論じている。

② 秘密の暴露の応用について証人の供述が信用できるものであるとすれば、同時に、必ず認識し、記憶している事実がある。それに答えられなければ証言の信用性は大幅に減殺されよう（たとえば、「覚書」一〇八頁には、目撃証人の供述が真実なら、証人はエレベーターの故障を知っているはずであるとして、エレベータを使用したかどうかを質問した事例を紹介している）。



(1) ひたすら誘導せよ。

《矛盾を提示するためにはどのような方法を用いばよいか。ひと言で言えば、証人に弁解させないことである。たとえば、証人に「なぜ」と理由を尋ねれば、証人は必死に弁解しようとする。仮に証言になんらかの矛盾があったとしても、その矛盾は曖昧になってしまう。それでは、証人に弁解させないようにするためにはどうすればよいか。そのためには、クローズドな質問、すなわち誘導尋問をすることである。ひたすら誘導することである。証人は「イエス」としか答えられない尋問を組み立てるのである。オープンな質問、とくに「なぜ」と聞く質問は、反対尋問ではタブーである》。

【コメント】

① 証人から、考える（はからいをする）余裕を奪うことが必要である。

② しかし、尋問者に反感を持つている証人は、あえて尋問者の期待しない供述にはしりやすいという意味で（第二の三一）、誘導にかかりやすい。そうすると、考えさせ（はからいをさせ）、しつぽを掴むのもよい（第五の二二③）。③ 証人が必死に弁解しようとする、語るに落ちることがある。ひたすら誘導すべき事案（後に矛盾の提示ができる事案）か否か、しつかりと見極めておく必要がある。したがって、「なぜ」と聞く質問が、反対尋問ではタブーである、とはいいい難い。自己の正当性を主張するため、証言に潤色が加えられることは極めて多い。それをピン止めで弾劾するのは、有効である。

(2) 矛盾を提示せよ。

《「イエス」を誘導するといっても、主尋問の内容を確認するだけでは意味がない。それでは、単なる塗り壁尋問である。それでは、誘導尋問においてなにをするか。矛盾を提示するのである。具体的には、誘導尋問によって、

証人を後に提示する矛盾へと導き、そこをピンで留める。そのうえで、証人に矛盾を示し、確認する。矛盾が明らかになれば、尋問を止める。それ以上に、だめを押ししたり、矛盾の理由を聞いたりはしない。そのようなことをすれば、矛盾が薄まってしまふ。》

# 【コメント】

① 「だめを押ししたり、矛盾の理由を聞いたり」しても、退路を断つてはならない。

② ちなみに、「塗り壁尋問」については、前述したとおり、証人が体験していない事実を述べている場合には、どこかに虚偽の徴表が残される可能性がある。無駄な「上塗り」をしただけで有害とまではいえないと割り切って、反撃の糸口を捜すのも悪くない。ただし、「熱心な判事」には疎まれよう。

(3) 自己矛盾を弾劾する三つのC。

《第一段階目のCは、Commit（＝肩入れ）で、法廷証言を確認し退路を断つ。第二段階目のCは、Credit（＝信用状況の確認）で、従前の供述が信用できる状況下でなされたことを示す。第三段階目のCは、Confront（＝対面）で、証人が従前の調書にない事実（欠落）を話しはじめた場合、右欠落が重要な事実であることを示す。》

# 【コメント】

① 「第一段階」では退路を断つても、「第三段階」では退路を断つてはならない。「自己矛盾の供述をする証人の供述は信用できない」といえても、「どちらとも真実ではない」とはいえない。

② 退路を断つことなく証人のプライドや立場に配慮した尋問には、御褒美がついてくる。

③ 「自己矛盾の供述をする証人が信用できないか」というと、答えはそう簡単ではない（ある部分は信用できるが、ある部分は信用できない）。三つのCの手順に従った弾劾が必要である。

## 2 反対尋問の準備

- (1) 証拠を十分に検討し、証人の供述を弾劾するポイントを探す。

《客観的事実や状況との矛盾がないか、供述の変遷がないか、すなわち自己矛盾がないか、という観点である》。

### 【コメント】

- ① 有能な実務家とは十分な準備をする者である。「評決」(第五の二二(6))の一節を思い起こすべきである。スタートが早ければ、ファインプレーは要らない。

- ② まず、ハンス・グロースやベテラン刑事の教えどおり、現地に趣くことである。ただ、現地に行けばよいというのではない。同じ条件が満たされていなければならない。木は茂っているか、交通量の違いはないか、隣家の明かりがあるかないかによって、結論を左右するような違いがある。現場に行ってみないと、条件の違いにすら気づかない。

- ③ 供述の信用性を判断する手法に従い、知覚、記憶、表現、叙述の各プロセスを点検し、突破口を探すべきである。
- ④ 長年の経験であるが、記録を後ろから読んだり、供述の内容を独り芝居(音読)にしてみると、新たな発見があることがある。

- (2) 弾劾すべきポイントが見つければ、尋問事項を組み立てる。

《証人の弁解を徹底的に予想し、イエスとしか答えられないような誘導尋問を重ねていく》。

### 【コメント】

- ① メモなど見ていては迫力に欠ける。「全部わかってんだぞ」、「うそ言ってもだめだぞ」という自信がみなぎっていなければダメである。

② もっとも、「しっぱをつかんだ」からといって安心してはならない（不運な証人の「しっぱをつかんだ」つもりが、虎の尾を踏んづけてしまっていることもある）。これは、日頃、裁判官が、「決め手をつかんだ」と思った「危ない」と戒められているところでもある。

## 第六 周辺諸科学に学ぶ

（別紙2）鈴木淳子『調査的面接の技法』には、インフォーマントを被尋問者（証人）に置き換えてみると、証人尋問においても、大いに参考なるものがある。なお、【コメント】は、筆者が付したものである。

## 第七 事実認定者の立場から

### 一 供述の信用性の判断

1 事実認定者である裁判官・裁判員が供述に本来的な証拠価値を認め得るのは、供述に信用性が認められるからである。供述の信用性が認められるためには、知覚↓記憶↓表現↓叙述の各過程に誤りがないことが必要である。この過程に誤りがある場合には、①供述の内容は客観的事実と符合してしない、②理由のない変遷がある、③内容自体に不自然・不合理な点があつて、臨場感や迫真性等に乏しく、重要な事実についての言及欠落があるなど、事実を体験した者のそれであるとは窺われない、④虚偽の供述を誘発する内的・外的事情がある、などというような信用性を窺わせる徴表がある。

そうすると、主尋問者は、事実認定者に対し、供述が信用に値するものであるとの心証を抱かしめるため、前述のような信用性の徴表がないことを明らかにすることにより、供述の各過程に誤りが認められないことを立証しなければならない。

他方、反対尋問者は、前述のような徴表があることを立証することにより、事実認定者に対し、供述の各過程のいづれかに誤りがあることを疑わせしめなければならない。

2 民事のベテラン弁護士は、「自分の依頼者はウソをいうような人間ではない。しかし、裁判官は分ってくれない」と嘆いた後、「だから、できる限り、依頼者の人柄を知ってもらうため、弁論兼和解に連れて行き、裁判官にその人柄を皮膚呼吸してもらう」という。

3 経験則上、供述の信用性が定型的・類型的に認められるか否かを判断することは必ずしも困難ではない。しかし、供述者の人柄を皮膚呼吸した者を納得させるような判断をすることは至難の業である。情報が、質的にも量的にも異なる。ましてや、「君はその場において一部始終を見たわけではないだろう。あなたは、人を愛したことがあるのか。自分は、彼女を愛してる。だから、見ていなくても信じられる」（夏樹静子のドラマ）といわれたら、返す言葉もない。

## 二 知覚段階における誤り

1 主尋問者は、知覚の過程の誤りに関し、心理学をはじめとする周辺諸科学の知見等を参考にして、誤りがないことを明らかにしなければならない。他方、反対尋問者は、これらの知見等を駆使して、誤りがある可能性を指摘しなければならない。

2 知覚の段階において介在する誤りについては、「覚書」八九頁以下で詳しく述べたところである。

3 われわれにできることは、様々な経験や知見を参考に誤りの生ずる可能性がなかったかを検証することである。

### 三 記憶段階における誤り

1 記憶の過程の誤りについても、「覚書」九一頁以下で詳しく述べたところである。

2 時系列を無視した尋問などは、民事事件における審尋では、よく用いる手法であるが、かなり効果的である（「ウエルマンの『技術』」第4章参照）。

### 四 供述の真摯性

1 供述の真摯性は、供述の各過程（P↓M↓E（V）↓N）のうち叙述（E（V））の問題である。虚偽の供述を誘発するような内的・外的事情がある場合に疑われる。その信用性は、供述者に被告人やその家族あるいは弁護人に対する憎悪や反感、被害者に対する過度な思い入れなどがないか考える。それを窺わせるような事情があれば、争点として顕在化するから、審理も尽くされよう。これらの点については、「覚書」九三頁以下で詳しく述べたところである。

2 問題は、隠れたる利害関係である。熟した言葉はないが、これは当事者の気づいていない利害関係（精神的葛藤）等である。たとえば、被告人は気づいていないが、かつて供述者またはその兄弟姉妹がそのいじめを受けていたこと、あるいは、供述者の父親が被告人の父親の経営する会社からリストラされたことなどといった個別・具体的に比較的分かりやすいものから、被告人の境遇に比べ自己のその惨めさなどといった情緒的で個人差のある分かりにくいもの（被告人のおよそ知り得ないもの）まで多々ある。

3 隠れた利害関係を探り当て、虚偽供述をなさしめるに至った原因を解明することも、地味ではあるが、極めて重要

な弁護活動である。そのためには、人間に対する知識が欠かせない。

## 五 供述の正確性

供述の正確性は、供述の各過程（P↓M↓E（V）↓N）のうち叙述（E（V））の問題であって、これについても、「覚書」で詳しく言及したところである。

## 六 陪審員の心証形成

1 前出・丸田『アメリカ陪審制研究』三二六頁によると、陪審廃止論者のジェローム・フランクは、「①陪審員は、通常偏見と先入観に支配され、証人や訴訟当事者に感情的に反応すること、②陪審員は、弁護士の外見や性格およびその法的技術に影響されやすいこと、③陪審員は、裁判官の法に関する説示（instruction）を十分理解できないこと、および、④陪審は、時間と費用を浪費する制度であること」を指摘し、……陪審が適切な真実発見の制度とはいえない、裁判の公正のため直ちに廃すべきものと考えたという。

2 また、同書三二八頁には、陪審員の偏見の問題や個人的特徴の評決過程への影響に関して、大略、以下のような研究成果が紹介されている（なお、偏見については、第二の注（2）参照）。

### （1）陪審員の情緒的側面——偏見と先入観

Landyらは、被害者の個性が犯罪者に対する陪審の反応（量刑の程度）とどう関係するか検討した。それによれば、ある事件において、被害者が（外見や経歴、家族関係などから）魅力ある場合、被告人は、平均して一〇・五五年の禁固刑を受けたが、そうでない場合、八・四八年であった。被告人の性格に関しても、被告人に魅力あ

るときは、八・五八年であるのに対し、そうでない場合は、一一・七五年であつた。被害者や被告人の個性が陪審の量刑に少なからぬ関係を有することが示された。つまり、人々は、もし被害者が魅力ある人物ならば、その犯罪は重大であると判断しがちである。それゆえ、殺人事件における最大の防御は被害者は殺されてしかるべきであつたという事実であるといわれる。同様の傾向は、原告の魅力に関しても説明される。Stephanらは、傷害事件において、魅力ある原告の場合、訴訟に有利であるばかりでなく、より高額な賠償金を与えられるという。当事者はかりでなく、弁護人の個性にも微妙に反応することが示されている。たとえば、誘導尋問は、一般に禁止されているが、それをうまく利用することで、陪審員の評決にimpactを与えうるといふ。それによると同一事件で、誘導尋問によつて偏見を与えられた陪審は、四一％の高率で被告人を有罪とし、誘導尋問のない場合の二二・二％を大きく上回っている。

## (2) 陪審員の demographic characteristics について

女性是一般に、同情心に富み、男性ほど有罪指向が強くないとされる。しかし、Millsらによれば、これは一般には妥当せず、強姦および殺人事件では、女性は、男性のそれぞれ五三％および五〇％の有罪率に対し、七八％、七一％を示すという。

陪審員および訴訟当事者の教育程度や社会経済的地位について、Adlerは、双方の程度差や地位差が大きいほど厳格な評決が生じがちであるとの結論を引き出している。なお陪審員の社会経済的地位とその行動について、JamesとSimonによる社会的地位や能力が評決のための討議に如何に影響するかについての研究がある。その他、年齢差、人種、宗教的態度、軍人歴、家族関係、婚姻の有無等に関して同様な行動研究が行われているが、いずれも陪審員の行動を決定づける要因とはなっていない。むしろ最近の研究は、これらの要因を可変変数として、



クロス分析により、いくつかの要因が複雑に絡みあうとき、著しい行動様式があらわれることを示している。では、陪審員たちが、このように感情豊かで、影響されやすい人々だとして、そのことが、どれだけ裁判上の正義を損なっているであろうか。また偏見のない公正な陪審員 (impartial jurors) を選任することが可能であるのか。

### (3) 公正な陪審員の選定

偏見ある陪審員の排除には、陪審選定手続 (Voir Dire) が利用される。Voir Dire は陪審候補者のなかから適格性を有した陪審員を選定する手続であり、当事者は陪審候補者に直接質問することによって、不適切な陪審員を排除しうる。Voir Dire には、①パネル全体を不適切陪審として無効とする、②陪審員として能力を欠くか、裁判の特赦な事項について偏見をもっているなど何らかの理由で不適当とする (for cause)、③理由を示すことなく排除する専断的排除 (peremptory challenge) の三つがある。①と②の理由による排除には理由の開示を必要とし、裁判所の許諾を要する。③はそのいずれをも要件とせず、原告か被告かいずれかの一方的申立てによって一定数の不適切な陪審を排除しうる。

3 なお、アメリカの陪審制について、「イギリスでは陪審員が決まって裁判が始まるが、アメリカでは陪審員が決まった段階で裁判は終了したも同然である」(カツ)とまで極論される程であるという(前出・田中嘉之著「事実認定における予断偏見」九四頁)。

## 第八 おわりに

一 以上みてきたとおり、反対尋問は真実発見に資するもので、被告人を断罪するにはその保障が不可欠である。しかし、神ならぬ身に、反対尋問という法力がくだしおかれても、それによって供述証拠に介在するすべての誤りを取り除くことはできない。

二 公判中心主義の徹底が是とされ、公判廷における証人尋問の比重が飛躍的に大きくなると、尋問技術の巧拙が裁判の帰趨を大きく左右するおそれがある。

三 しかし、尋問技術が稚拙なために被告人が有罪にされることは、「利益原則」の本旨に悖る。無罪は、勝ち取られるべきものであっても、買い取られるものであってもならない。

四 そうすると、有罪判決をするために、評決方法をさらに厳しくするか、有罪認定のハードルをさらに高くすべきであろう。

五 前者（評決方法の変更）は立法論に過ぎないから、現行法上は、後者（有罪認定のハードルの変更）によるほかない。

六 無罪判決の動向をみると、全くの感想であるが、実務は、後者の道を取り始めているように思われる。

七 いずれにしても、裁判員裁判が市民感覚なる神の声によって後押しされ、寛容性を失った社会の代弁者となり、ムルソーのみならずサッコとヴァンゼッティの生命までも奪ってしまうことにならないよう祈りたい。

(別紙1) フランシス・L・ウエルマン『反対尋問の技術(上)』(骨子)の紹介

第1章 序言

「雷神をも拉ぐ<sup>ひ</sup>」ことをもつて常道とするとこころえるような旧式の雄弁家は、今では昔ほどの人気はなくなっている。  
「弁護の技術においては、熟練に至る捷徑はなく、王道もない」。

〔筆者コメント〕

渡部保夫『無罪の発見』の著者は、「あとがき」のなかで、事実認定に熟練するためには、「手に弓箭なきも、鳥を見れば、すなわち射を擬す」とされている。「三昧が折れたら両手で叩け、パチが無ければ櫛でひけ」(風雪流れ旅)が極意である。

第2章 反対尋問の尋問態度

1 反対尋問に熟達しうる最も確実な方法は、体験を積み他流試合を重ねることである。そのためには、非常に高度の才覚(論理的思考力、研ぎ澄まされた五感の働き、無限の忍耐力と自制心、他人の心理を直感的に読みとりその性癖と意向を見抜く眼力、強靱・的確な実行力、当面する問題自体に対する融通無碍の判断力、人並み以上の注意力、とりわけ尋問中証人の弱点を見抜く才能)が要求される。それは、いわば訴訟代理人と証人の精神的決闘である。

2 証人が善意の間違いをおかしているのか、それとも偽証をしているのか。そのいずれかによって、反対尋問のやり方は、おのずから異なってくる。「証言を疑うことと証人を疑うこと」をはつき区別してから始めなければならぬ。それは、訓練を経た尋問家なら、たいてい勘で分かる。練達の反対尋問家は、相手方の尋問中も、めったに彼から眼をはなさない。証人の顔(とくに口)のすべての表情、手の動き、発言の際の態度、全体的な拳措動作でさえも、証人の全貌を知るための手掛かりとなる。

3 （証人が善意の間違いをおかしている場合について）、証人は、その所見を披瀝するため準備を整えて出廷してくるものである。したがって、「自分の証言に対し攻撃が加えられると、まるで自分の誠意が疑われでもしたかのようにつけから憤慨してしまう」。もしも、反対尋問者が、冒頭から、証人に対する態度を通じて、「自分が彼の誠意を疑ってかかっていることを気づかせてしまう」と、証人は忽ちにして、体を硬直させ、内心、敵愾心を燃やしてかかつてこよう。逆に、尋問者の態度が丁重で、融和的であると、証人は、だれもが抱えている畏怖感をなくしてしまい、知らず知らずのうちに公平に受け答えるようになり、証言の弱点を露呈してしまう。

4 陪審の注意が裁判の推移に引きつけられるのは、人間誰しもが持っている勝負好きの本性とでもいうか、対決を見ずにはおかれないからである。弁護士の間でも、「快活な性格な人、見るからに明けっぴろげな態度で話す人、真実を発見しようと熱中しているように見える人、自分に不利な証言をした人にも丁重な人、無力・無害な証拠に対してまで無数の異議・抗議を申し立て裁判の進行を遅延させようとするような行為は常に避けようとしている人、自分が今何をしようとしているのか万々承知したうえでそれが終われば着席し凡ゆる機会にフェア・プレイの精神を示すように思われる人」は、自分が訴訟代理をしている側に有利な雰囲気をもし出し、陪審が評決をくだす際に無意識のうちに強い影響力を及ぼす。

これに対し、弁護士のなかでも、「なんの目的もなく果てしない反対尋問で裁判官や陪審を飽きあきさせる人、しょっちゅう平静さを失って証人に向かって歯をむき出すような人、不安気な洪面をしている人、一本調子で耳ざわりな甲高い声の人、薄汚くだらしない身なりの人、ともすれば不正なやり方で相手方や証人ないし訴訟代理人を出し抜き是非でも勝訴しようと決意をしているかのように思われる人」は、やがては、彼自身およびその依頼者に不利となるような偏見を陪審に抱かせ、全く還りみられないことになる。

〔筆者コメント〕

- ① まさに「法律的知識」に對し千の人間に對する知識」(ラートブルフ)が必要となる。
- ② 証言を疑ふことと証人を疑ふことは違ふ。ウェルマンは、訓練を経た尋問家なら、「たいてい勘で分かる」とするが、そう簡単なことではない。自分の依頼者の言い分と食い違っているからといって、証人がウソを言っていると決めつけることはできない。「最初に、事件を見て、最後に人を見よ」である。双方がウソをついていないのに、なぜ違いが生じたのか、その原因に思いを致すべきである。そうすれば、証人の退路を斷つことなく、多少とも自分の側に有利な答えを引き出せる。欲張つてはならない(この点は、後述しよう)。
- ③ ラポールの形成が、ここでも重要である。
- ④ 尋問者の態度や人格で、証人からよい供述を引き出されるかどうかが左右されることが少なくない(この点は、後述しよう)。なお、(別紙2)「鈴木淳子『調査的面接の技法』の骨子」も、興味深い。

### 第3章 尋問事項

- 1 尋問者の仕事は、自己側の主張を陪審に認めさせることである。明確な意図を持たずのんべんだらりと質問することは避けるべきである。
- 2 主尋問を通じて、証人の弱点が見つかったのであれば、機を失せず直ちに核心に入るべきである。
- 3 どのような証人も、自己矛盾に陥ることをおそれている。したがって、多くの場合、証人がおかした間違ひについては、露骨な質問によつて引き出すよりも、むしろ推測のかたちで分らせておくべきである。その際、ある証人の証言を減殺するための手段としては、それよりもっと真実性のある別の証言が後ほどなされる手筈になっているということを陪審に知らせしめるような質問を、その証人に対してしておくのがよい。
- 4 おしやべりの証人には、どんどんしやべらせると、抜き差しならぬ羽目に陥らせることができる。また、なにで

も過大に証言する人には、おだてあげて、陪審たちの反発を買うような誇張的表現へ誘導するとよい。

5 輝かしい実績を残したデイヴィッド・グラハムは、「弁護士たる者は、証人に対して、第一に、どんな答えが返ってくるかわかっていないかぎり、ないしは第二に、どんな答えが返ってきてても心配ないかぎり、決して反対尋問してはならない」（おそらく冗談であろうが）、といったている。

6 証人が事実の全貌を打ち明けたがっていないと思われるようなふしのある事件では、陪審が聞いて意外で現実離れがしていると思われるような質問をしてみるのも一方法である。

〔筆者コメント〕

① 「問わずに落ちず、語るに落ちる」ということがある。

② 「どんな答えが出るか分からなくとも、勝負に出なければならないような劣勢な事件もある。面を下げていると、自由自在に打たれてしまう。逃げてはならない。「太刀先三寸」の心得である。もちろん、事件に習熟していないと、藪へびになる。

③ 「北風と太陽」の寓話は、証人尋問にも当てはまろう。もつとも、理解を示すと、再現なく増長する証人もいる（それはそれで一定の目的を達していることになろう）。「なんにでも過大に証言する人には、おだてあげて、陪審たちの常識上の反発を買うような誇張的表現へ誘導する」作戦もあるが、毅然とした態度を示すことがよいケースも少なくない。尋問者に真相を見破られていくと思うと、ウソはつけない。ただし、はったりは墓穴を掘る。陪審の心証も悪くなる。

#### 第4章 偽証した証人に対する反対尋問

1 証人が偽証を意図したかどうか（善意の証人が無知ないし党派心のために誤った供述をしたのかどうか）の評価を誤ってはならない。

2 証人の態度やその言葉づかいの上に必ず偽りの目印となるものが遺されるものであるとすれば、最初の質問をする際に証言内容を繰り返していわせるといふ方法は、多くの場合有効である。偽証者ならば、前に述べた証言を一

言一句違えず繰り返すだろうし、そのことは彼が証言を教え込まれたことを物語っている。もちろん、証人が一言一句違えず、しかもなお真実を語っている場合も、なさそうだとはいえても、絶無であるというわけにはゆかない。そこで、まず最初に彼の証言内容の中間の部分を語らせ、次いで一挙に最初の部分に逆戻りさせ、そのあとで最後の部分を語らせるという方法も試してみるとよい。もし彼が、記憶をたどりながら話すというより、むしろ機械的に話すのであれば、彼は、この方法によって馬脚を現したと考えて間違いない。彼には、自分が証言で使った言葉と結びつくはずの事実が欠けており、ある一つの証言をそのかぎりで思い起すことはできても、その枠からはみ出すことはできない。また、別の方法として、証人の注意を、彼自身が語った証言の大筋とは全く関連のない別の事実の方へと引き離してみるのもよい。彼としては、そのような質問内容は初耳であるから、全然答えは用意していないため、想像力に頼るほかない。そのあとで再び、証言の本筋のどこかへ彼の想念を呼び戻し、彼の精神がその問題に乗り移ってから、また急にもとの事実に戻って同じ質問を繰り返せば、最初とは異なる答えをするであらう。

3 ある場合には、証人自身の口から矛盾したことを言わせることができそうなので、二の論点にやまをしほることも、賢明なやり方である。その場合、彼の証言内容に関連したことがらで、彼がまだ証言しておらず、また彼自身が全く証言の用意をしてもいそうにないような事項について質問するのが効果的である。この点で、リンカーン暦事件は興味深い。

(1) 反対尋問

①リンカーン「それであなたはその直前にロックウッドと一緒にいて、撃たれるところを見たのですね？」②証人「そうです。」③リンカーン「それではそのすぐ近くに立っていたんですね？」④証人「いや。二〇フィ

ートばかり離れてました。」⑤リンカーン「二〇フィートだったんじゃないんですね。」⑥証人「いいえ。二〇フィートか、それ以上でした。」⑦リンカーン「そこは、広々とした野原でしたか？」⑧証人「いや、林の中です。」⑨リンカーン「なんの林でしたか？」⑩証人「ブナの木の本林です。」⑪リンカーン「八月といえば、木に葉はむしろ茂っていましたね？」⑫証人「どちらかといえばね。」⑬リンカーン「それでは、このピストルですが、これはそのとき使われたものと考えますか？」⑭証人「そのように見えます。」⑮リンカーン「被告が狙撃するところが見えましたが？―銃身をどんなふうにおら下げていたとか、そんなところが全部見えましたが？」⑯証人「ええ。」⑰リンカーン「現場は、集会の場所のそんな近くだったんですか？」⑱証人「一マイル足らず離れていました。」⑲リンカーン「電燈は、どこについていましたか？」⑳証人「牧師席の脇の上の方です。」㉑リンカーン「一マイル足らず離れていた？」㉒証人「そうですね―その点はすでに答えましたよ。」㉓リンカーン「ところで、あなたは、その現場で、ロッキウツドか被告人かが蠟燭の灯を持っているの見たかったんですか？」㉔証人「いいえ。そんなところに、なんでまた蠟燭の灯が要るんですか？」㉕リンカーン「じゃあ、あなたには、狙撃のようすが、どうして見えたんでしょうね。」㉖証人「月明りです。」（反抗的に）㉗リンカーン「夜なかの一〇時だというのに狙撃のようすが見えたんですか―それとも、電燈のある場所から一マイル足らず離れたブナ林の中ですよ？……ピストルの銃身も見えましたか？……その男が発射するところが見えましたか？……二〇フィートも離れたところから、それが見えましたか？……月明かりで全部見えたんですか？……集会所の電燈から一マイル近くも離れていて、それが見えたのですか？」㉘証人「そうですね。前にもそう申し上げたはずですよ。」㉙今や、人々の関心は、いやがうえにも高まり、どんな小さなことでも一言も聞きもらすまいと、身を乗り出した。リンカーンは、やおら、その上衣の脇ポケットから青表紙のつ



いた暦を取り出し―徐にそれを開き、証拠として提出したのち、陪審ならびに裁判官に見せ―ある一頁を開いて、月は当日の夜には見られず、翌朝一時にならないと昇らないというその記事を、ゆっくりと、用心深く読み上げた。

(2) 証人は、この後、自分が犯人であることを自白し、リンカーンの弁護は大成を取めた。ちなみに、イリノイの法曹のなかには、この事件でリンカーンは陪審の前でトリックを使い、その殺人事件のあった年の暦と見せかけて実は古い暦を見せたという説をなすものも多いという。

4 訴訟指揮に当たる裁判官は、そのほんの一言が弁護士のような雄弁よりも重みをもつところから、弁護士たちが目的もなく延々続きそうな反対尋問を始めると、しばしば「××さん、これは時間の無駄だと思います」とか、「私には、その質問の趣旨がわかりません」とか一言いって、反対尋問を中止させるだろう。これは弁護士にとって大きなマイナスとなることであって、それを取り返すことは、よほど経験を積んだ弁護士しか容易にできない。

〔筆者コメント〕

① 「証人が偽証を意図した」と決めつけたら、中立証人を敵性証人にしてしまふ。

② 体験していない事実を寸分間違いない述べるのは簡単なことではない。それが一見主題からほど遠い事実の場合はとくにそうである。事柄の性質上、実際体験した事実なら、忘れたり、言い違えるはずのない事実がある。「ウソの階層性」を利用した尋問で、成功例も多い。

③ 「覚書」一〇八頁でも、成功事例を紹介している。

## 第5章 鑑定人の反対尋問

1 一般論としていえば、鑑定人に対して相手の土俵の中で対抗しようと試みることは、賢明な策ではない。その鑑定人の理論なり学説について長々と反対尋問したりすると、必ず悲惨な結果に陥るのであって、めったに試みるべ

きではない。

2 鑑定証人の証言の効果を一挙にぶち壊す方法として、彼の専門家として経験なり能力・特技なりを試すために公判中に不意をついて何らかのテストを試してみるのも、ときには有効である。彼がそのテストに合格しそこなった場合、彼は陪審の目の前で笑いのものにされるわけで、陪審は、彼を嘲笑うことによって、その前に彼がしていた尋問者に不利な証言を忘れてしまう。

〔筆者コメント〕

- ① 鑑定証人の証言も、一定の事実関係を前提としているが、事実関係の存否の判断には、必ずしも専門的知識を要するものではない。
- ② テストによって証人のプライドを傷つけ、笑い者にする弁護士顔はルオーの描く裁判官の顔のように醜い。リスベクト・側隠の情を忘れてはならない。

## 第6章 反対尋問の手順

- 1 不誠実な証人の反対尋問を行う場合には、その手順がものをいう。大事な質問は、やみくもにすべきはなく、証人がその事実を突き付けられたときに否定も弁明もできないようにお膳立てをしたうえで質問すべきである。
- 2 他方、最初の二、三の質問でもって証人に痛打をくらわせるのも、ときには得策となる（もちろん、それだけの材料を持っていないとはならない）。第一の利点は、陪審は、主尋問を聞いて、それぞれに心証を形成したところであるから、初手から「一撃をくらわせる」ことになれば、後になって加えられるよりも印象的である。第二の利点は、それによって証人に恐れを抱かせ、その後の返答に際しても、舌鋒を鈍らせ、敵性証人を手なづけ、好意的な証人に鞍替えさせることができる。そうでなくても、この優位を保ちながら矢継ぎ早に質問を続けてゆけば、矛盾の泥沼に引き入れ、信用性を失わせることができる。時には、激怒するあまり、しばしば我を忘れ、つい本音を

しやべらせてしまわせることができる。

3 しかし、証人に恐れを抱かせて偽証を訂正させるだけの材料がない場合、一般論として同じ順序で同じ内容を繰り返させるのは時間の浪費である。まず、彼の証言のうちで最大の弱点と思われる点を選び出し、彼の準備が最も整っていないような付随的な情況に狙いをつけるべきである。その場合、彼がその先を読んで適当な作り話をしないように、論理的な順序に従ってはならず、あちらを訊いたかと思うと、次にはこちらを訊くというふうに彼をはぐらかしながら、彼の本筋とは直接的な関連のない偶然的な情況についていちいち明確な答をするよう彼をそこに釘付けする。そして、質問のテンポを一層早め、重要でない質問を次から次へとしながら、そのなかで一つの肝腎な質問を同じ声の調子で行い、自己矛盾の迷路へ陥れるのがよい。

4 最も割に合わないが、効果的な方法は、まずある証人からは、一見して明らかに些細なことで分かるようなことを承認させるだけで満足し、次の証人からは、たぶんもつとまらないことを承認させ、徐々に材料を集めてゆくという方法である。こうして集めた材料は、総括弁論の際にモザイク式に組み合わせてみると、有利な評決をもたらさずにおかない。

5 証人のうちには、偽証するのは嫌だが、なにがしかの利害関係から、自分が知っていることを洗いざらいしゃべってしまうようなことはしたくないと、内心決めてかかっている人がいる。このような場合には、「憶えてません」などと逃げられないよう、初手から露骨な質問をしたりせず、狙いをつけた話題にゆくりと接近するのがよい。そして、「私は決してあんなことを言うつもりはなかったです。あの人が私をあんな立場に立たせたものですから、私として、ありのままのことを言ってしまうなければならなかったのです。でなければ、私が嘘をついていたことを認めなければならぬものね。」といわせしめるように創意工夫しなければならぬ。

6 とくに頭がよく、機知に富んだ証人を扱うには、もし「切り札」を持っていたら、それを隠すことである。そして、まず証人からその証言の細部まで完全に言質をとつてしまい、最早どんなもつともらしい弁明もできないようにしてしまふまで、手の内を明かさないことである。

7 反対尋問をするについては、つねに証人を自己の支配下におき、精密な質問の枠内で返答させるようにすることである。

8 最後になによりも重要なことは、尋問を切り上げる潮時につねに気を配っておくことである。証人を抜き差しならぬ矛盾に追い込むことに成功した弁護士に多いが、それに満足せずに質問を続行し、その結果、尋問が先細りになって、ついには、彼らがそれまでに陪審の心理に占めていた優位を無に帰せしめてしまふ。「一本とつたら切り上げよ」というのが、反対尋問についての格言の一つである。陪審員たちは、証人を——信するにせよ信じないにせよ——一色に塗りつぶしてみる傾向がある。もしも陪審員が証人を信用しないとすると、たといその証人の証言の大半が真実であつたとしても、その全部を無視してしまふからである。

〔筆者コメント〕

この関係では、（本文の）第四、第五で検討する。マニュアルは素人のためのものである。プロには臨機応変な対応が求められる。

## 第7章 無言の反対尋問

1 無言の反対尋問ともいうべきやり方を用いると、案外、陪審の心理に不思議な効果を及ぼす。

2 まず、反対尋問するつもりであるかのように、すつくと立ち上がる。すると、証人の方では決然とした表情で尋問者の方に向きなおし、最初の返答で尋問者を粉砕してやろうと身構えるであろう。これが手掛かりとすべき信号である。信号が出たら、一瞬躊躇の色を示さなくてはならない。そうしておいて、愛想よく、しかし恰も彼女に質

問してみても徒労に終わるのではないかと案ずるような思い入れで、彼女の方をじっと見つめ、それから腰を下ろすのである。つまり、これだけのことを名優さながらに演ずれば、陪審に対して、「どうしようもないじゃないですか？ 相手がご婦人ではね」と語りかけるだけのことはしていることになる。

3 反対尋問の唯一の目的は、敵性証言の威力を打破することであるから、やってみても無駄だと分かっているような試みは、証人の陪審に対する立場を強化するだけだということを、銘記しておかなければならない。無言で通すことは何時間も質問することよりも概して良き結果をもたらすということは、どんなに繰り返してもいい過ぎということはない。

〔筆者コメント〕

① 傍聴席向けのパフォーマンスは不要である。

② 下手な演技は、証人からも陪審員からも見透かされる。外連味のない態度、いさぎよい態度が事実認定者に好印象をもたらす。「あの先生があそこまで言われるのだから……」という信頼を勝ち取るにしくはない。

③ 「沈黙の効用」については、(別紙2)「鈴木淳子『調査的面接の技法』の骨子」も参照されたい。

## 第8章 「証言の誤謬」をただす反対尋問

1 証人自身が誠実であり何らの偏見・党派心あるいは間違った供述をする動機を持たないのに、何らかの課題が与えられてその解明を求められると真実を覆い隠すような相互作用を及ぼすような——人間の本性および人間の理解力に内在しているような——ある種の要素がある。

2 第一は、感覚の解釈である。感覚の解釈は、個々の人間の所業であり、人間が異なれば、その体験や性向の違いに対応して、同じ感覚に対するその解釈はおのずから異なってくるであろう。この過程は、最も即時的であり、無

意識的である。

3 第二は、欲望である。欲望は、ある特定の点に注意力を固定しようとする意志を鼓舞するのであって、その結果、その特定の論点なり命題なりを、他のそれを除外したかたちで強調させることになる。そして、その意志は、注意力をある問題点に固定させるので、その効果を増大させるのに対して、ある問題点を度外視させるので、その点の効果を縮小させる。

4 第三は、記憶である。記憶は、「証言の誤謬」の他の要素のうちの最も重要なものであり、その創出過程そのものになっている。「われわれには、それがわれわれ自身の気持をそそのかなうものである場合には、その気持に逆らうようなものは見失いがちになるという極端な傾向があつて、そうなると、追憶によって行われる再現は、全く一面的なものとなる。（このことは）同一の出来事ないし会話について、まだ記憶がなまなましく、しかも真実を語ろうと心から願つていてさえも、人によって全然違つた説明がなされるという事実によって、たえず証明されている」。

5 それぞれの証人の判断を曲げ、その良心を窒息させ、あるいはその理性を曇らせてしまうそれぞれの縁由を陪審に示すための方法を摘示するのは困難である。具体的状況に応じて、創意・工夫するほかない。しかし、そのためには、周到な思索と研究を重ねておかなければならない。

〔筆者コメント〕

記憶の関係では「覚書」九一頁以下を参照されたい。

## 第9章 証言の蓋然性をただす反対尋問——尋問者の人格等

1 「およそ人間の所業において数学的に絶対の確実性が貫徹されることはめつたにないのであるから、理性に従い

公共の利益に即して考える以上、裁判官はもとより、人間誰しも、事の真相を判定するにあたっては、それぞれの証言の蓋然性のうち、いずれのそれが高いかによつて律するはずだ、という結論にならざるをえないのである」(マンスフィールド卿)。

2 どのような裁判においても、その事件をとりまく状況のうちで、最初はあまり意味もなく関連性さえないようにみえるが、手ざわよく扱えば相互の脈絡がついて結局は人々の心中に確信となる楔ともなるような一連の諸状況があるものである。証言の蓋然性を顕現するうえで重要な役割を果たすのは、自分の側の証人に対する尋問の場面であることは間違いないが、反対尋問の場面でも、まさに腕が振られるべきものである。人々は、誰しも、彼自身、同じ状況のもとでなほこう言い、こうしたであろうということ基準にして、蓋然性を判定する。「水に照らせば面と面と相肖るがごとく人の心は人に似たり(旧訳聖書箴言第二十七章一九)」。

3 人生万般の経験および「その結果としての人々の知識を別にすれば、弁護士をして、ある事件の主要事実をとりまく諸状況を、裁判官ないし陪審に最大の効果を与えるよう扱うことをえせしめるものは、勤勉と、そして公判準備への精進である。

4 そして、良き公判弁護士たるに必要な凡ゆる属性のうちで最も重要なものは、人を引きつける個人的魅力である。

〔筆者コメント〕

人を引きつける個人的魅力とはなにか。「オーラ」「貫禄」等々ではない。「いちずさ」、「ひたむきさ」、「やさしさ」は、必ず人のことを打つ。

## 第10章 証人の信用性をただす反対尋問とその濫用 △省略▽

第11章 反対尋問者が直面する二つの「大きくはないが目に見えぬ危険」〈省略〉

第12章 反対尋問の使用と濫用についての小論 〈省略〉

第13章 著名な反対尋問家とその手法

反対尋問の技術を身につける最良の方法の一つは、弁護士模範となるような偉大な反対尋問家の手法を研究することである。実際、偉大な反対尋問家といわれるような人も、十中八九、現実の実務の中で幾人かの大弁護士の技術を研究する機会をもっていたという事実があったからこそ、成功を勝ち取ることができたのである。

## （別紙2） 鈴木淳子『調査的面接の技法』の骨子の紹介

〔筆者のコメントは、同志社法学「杉田宗久先生追悼号」掲載予定の別稿「民事裁判覚書——和解を中心として」に記した。〕

第一「ガイドライン」一〇五頁以下の骨子 ただし、「インフォーマント」を「インフォーマント（↓証人）」、「面接者」を「面接者（↓尋問者）」、「面接」を「面接（↓尋問）」と読み替える。

一「面接前」 〈省略〉

二「面接開始時」(1)礼儀正しくオープンでフレンドリーな印象を与える。(2)時間を守る。(3)インフォーマント（↓証人）自身の好む呼ばれ方（姓か名か肩書きか）を確認しておき、面接（↓尋問）中に適宜用いる。

三「面接中」(1)先入観、ステレオタイプのものの見方、偏見を持っている可能性を自覚する。(2)面接（↓尋問）はインフォーマント（↓証人）との人格の交流であると認識する。(3)インフォーマント（↓証人）の話にはしっかりと耳を傾け、評価はしない。(4)時には自分の考えや意見を直に表明する。(5)インフォーマント（↓証人）の話を中断



せず、うなずきやあいづちを適宜はさむ。(6)尋問者とインフォーマント(↓証人)は対等の関係にあり、相互に協力しあうパートナーである。インフォーマント(↓証人)をコントロールしたり、回答を誘導したりしない。

四〔面接終了時〕インフォーマント(↓証人)に満足感を持つてもらって面接(↓尋問)を終了することが好ましい。  
五〔面接終了時〕感謝のことばと一緒にインフォーマント(↓証人)に送る。

## 第二「面接のスキル」一一〇頁以下の骨子

一〔言語的スキル〕(1)適当なあいづちを用いてインフォーマント(↓証人)が話しやすい状況を作る。(2)インフォーマント(↓証人)の所属する社会的・文化的グループにふさわしい言語を用いる。(3)あいまいな表現は使用しない。  
面接(↓尋問)で用いる大切なことば(キーワード)の意味は面接(↓尋問)開始時あるいは初出の際に説明しておく。(4)インフォーマント(↓証人)の言葉遣いや表に不明な点があれば必ず確認する。(5)偏見や差別を含むような表現は使わない。(6)求める情報にふさわしい質問をする。(7)インフォーマント(↓証人)の発言内容を確認する。  
(8)面接(↓尋問)の目的やテーマから話がそれないように注意する。(9)何が話されたかだけでなく、何が話されていないかにも注目する。

二〔感情の読み取りにかかわるスキル〕(1)インフォーマント(↓証人)のノンバーバル・コミュニケーションに注意し、話の内容の信用性を判断する。(2)インフォーマント(↓証人)の感情を、面接(↓尋問)のベースや質問内容についての適切性を判断する際の重要な情報源と考える。

三〔デリケートな内容や質問の場面に対処するスキル〕(1)インフォーマント(↓証人)ができるかぎり使い慣れている言葉を使う。(2)現在でなく過去のことについても尋ねてみる。(3)一連の質問の最後にデリケートな内容の質問をもつてくる。

### 第三 「ノンバーバル・コミュニケーション」一二三頁の要旨

#### 一 動作学のスキル

1 「表情」相手に最も多くの情報を与えるのが表情であれば、相手に与える情報の質と量をコントロールし、もつともたやすく偽ることができなのが表情である。これを見抜くためには、相手の表情をじつと見守るだけでなく、身体 of いろいろな個所の動き（特に手の動き）と話すことばの間にちぐはぐな不自然さがないかどうかに目を向けておく。

2 「視線」(1)認知機能「尋問者がインフォーマント（↓証人）をじつと見るのは、インフォーマント（↓証人）や話の内容に好意や興味を持つていることを示す。しかし、だからといってあまりじつと見つめるとインフォーマント（↓証人）を不安にさせたり、回答を強要したりすることにもなりかねない。(2)フィードバック機能「面接者（↓尋問者）は自分の発言に対するインフォーマント（↓証人）の反応を見て取り、次の質問やことば遣いの指針にする。特にインフォーマント（↓証人）の表情、言いよどみ、沈黙などに注意する」。(3)調整機能「視線には会話がスムーズに流れるよう調整する機能がある。話し手は話が終わりに近づくとき聞き手を見つめ、徐々に声を小さくする。また、聞き手は、次に話す内容について考えている時には、相手から視線をそらせる」。(4)表現機能「視線によって自分の気持や感情を相手に伝えることができる。互いに好意を持てば、視線は活発に交わされる」。

3 「アイコンタクト」アイコンタクトは、ひとつには、面接者（↓尋問者）がインフォーマント（↓証人）の話に熱心に聞いているということを伝えるため、もうひとつには、誠意をもって面接（↓尋問）に取り組んでいるという印象を与えるため重要である。面接（↓尋問）中にインフォーマント（↓証人）とのアイコンタクトがあ

まりうまくゆかない場合には、理由を考慮し、面接者（↓尋問者）側に問題があるというときには、アイコンタクトを減らしたり、態度やことば遣い、質問の内容を変更してみるのもよい。

4 「うなずき」 インフォーマント（↓証人）に好印象を与えるためには、タイミングよく適切な場面で、さりげなく、しかし熱心に聞いているというサインがインフォーマント（↓証人）に通じる程度にうなずきを行うことが効果的である。うなずきに加えて、「そうなんですか」「なるほどねえ」などとあいづちを打ったり、インフォーマント（↓証人）の話の一部をそのまま繰り返したり別の表現に言い換えたり（本当に嬉しかったでしょうね）「それ以上に嬉しいことはないですね」すればインフォーマント（↓証人）はますます熱心に話してくれるであろう。

5 「笑い」 笑いには実に様々な種類がある。笑いの働きは相手への好意を示すあるいは相手への攻撃の意思のないことを示すサインであり、コミュニケーションの道具として使われる、社会的な表情である。

#### 6 「姿勢」    △略▽

7 「嘘」表情はごまかせても、発言や身体全体を観察しているとどこかにシグナルが現れることが多い。たとえば、嘘をついている時には、発話の速度が速くなったり、発言時間が短くなったり、言い誤りが増えたりする（大坊）。また、話している言葉と手の動きが一致しない恐れがあるため手振りが少なくなり、鼻や額などの顔の一部に興味もなくさわる場合がある（Morris）。さらに、足の動き、身ぶり、うなずきが減少する。聞き手はそこにしっくりしないものを感じる。面接（↓尋問）において、インフォーマント（↓証人）の声、話方に、身ぶりが発言内容とじっくり合っていて不自然さがないかどうか注意を払う必要がある。

## 二 周辺言語学のスキル

1 「声と話し方」 説得力や落ち着きの求められる面接（↓尋問）の場では、低音のよく通る張りのある声で、適当なスピードで話すことが必要である。

2 「沈黙」 沈黙にはさまざまな意味のメッセージがこめられており、強力なコミュニケーション手段となる。沈黙をなくそう、問われてもいないのに自発的にいろいろなことをしゃべり始め、余計なことまで話してしまうことがある。

### 三 近接空間学のスキル

1 「個人空間」 (1) 個人空間は、自分の身体を中心にしてその周囲に持っている空間で、その中に他者が入ってくると侵害されたような感じで不快となる。(2) 面接（↓尋問）の場合も、内向的な人が対象の場合には離れて、外向的な人と話す場合には近づいて話すようにする。

2 「対人距離」 (1) 親密（密接）距離（0～45 cm） 一般には家族や恋人など、ごく親しい人との距離である。ただし、この距離を保ったまま人とのかわりあいが続くと、互いの間に親近感がうまれやすい。(2) 個体距離（45～120 cm） 相手方に手で触れることの可能な、一般的な距離である。心理的安定を保つために必要で、他人がこの距離より近くになると強いストレスを感じる。個人面接法に向いている。(3) 社会的距離（120～360 cm） 手のばしても相手の身体に届かず、フォーマルな場面にふさわしい距離である。インフォーマント（↓証人）にとっては、これくらい離れていたほうがリラックスできる。(4) 公衆的距離（360 cm以上） 講義、講演、演説などに用いられる距離である。個人面接法にも複数面接法にも不向きである。

3 「座る位置」 一般的には、机やテーブルをはさんで互いに真正面に座るより、いわゆるカウンセリング座りといわれるような九〇度の位置に座るのがインフォーマント（↓証人）の緊張軽減に効果的である。話の内容やイ

ンフォーマント(↓証人)によっては、並んで話すほうが話しやすいかもしれない。

#### 四 対物学のスキル

服装や化粧などには、自分が他者からどう見られるかという印象を操作する機能があり、コミュニケーションに関して大きな影響力を持っている(大坊)。(1)デモグラフィック特性および役割の伝達(インフォーマント(↓証人)の服装から、社会的地位や所属集団に関する情報やインフォーマント(↓証人)自身がそれらをどのように認識しているかを知る手掛かりが得られる)。(2)パーソナリティ特性の伝達(面接者(↓尋問者)は、面接内容の理解に欠くことできないインフォーマント(↓証人)のパーソナリティ特性についての重要なヒントをインフォーマント(↓証人)の身につけているものから得られる。同時に、インフォーマント(↓証人)にも、服装からこちらのパーソナリティ特性を把握されることがあるので、何を身につけて面接(↓尋問)するかを考えることは大切である)。(3)感情状態の表出(一般的には、気分がよく嬉しい時は明るい色の服装、悲しい時は暗い色の服装と考えられる。面接者(↓尋問者)自身が面接(↓尋問)に際しての心構えとして前向きな明るい気分を服装に反映させることができる)。(4)個性の表現(服装はそれを選んだ人の個性を表現する。インフォーマント(↓証人)の回答内容を正しく理解するための重要な情報を提供してくれる)。(5)対人関係や場の認識の伝達(フォーマルな服装なら相手に敬意を表し、ラフな服装なら非公式でリラックスしあえる関係とみなしていることを相手に知らせることができる)。(6)印象操作(意図的に選んだ服装によって、相手に与える自分をコントロールする。一般的にいえば、面接者(↓尋問者)はあまりラフな格好はせず、きちんとした服装をして清潔で明るい印象を与えたほうがよい)。

#### 五 その他のスキル(接触学、環境要因、時間学)

1 接触学 人は、心理的安定を得るため、話している最中に自分の身体に触れる場合がある。それまで特になに

もしなかったインフォーマント（↓証人）にそのような仕草をはじめたら、なにかしら話の内容に不安を招くものがあり、自分をなだめあるいは落ち着かせる必要があると解釈するほうがよい。

2 環境要因 室温や湿度も大切な環境要因である。グリフィットの実験によると、人は高温多湿の不快な環境では他者に対する評価が非好意的になり、快適な温度と湿度で気分がよければ、より好意的になるという。

3 時間学 インフォーマント（↓証人）が話しやすい環境をつくり、会話の流れを阻害しないようにし、面接者（↓尋問者）が話に興味をもっているということをはつきり示し、無関心だとか時間がなく急いでいると思われるような振る舞いや素振りをいっさい見せないよう留意する。

六 性差 男性より女性のほうが単語力や表現力に優れ、相手のことばに耳を傾け、その内容を深く理解することが得意だとされている一方、男性は女性より話に説得力があるが、断定的で、相手の話をささげる傾向があるとされている。